第九編　教　育

「滝川市の教育元年」

戦後、GHQの命令により旧制度の中央集権的行政が大転換し、なじみのうすい行政上の委員会が各種つくられ、毎日の経済的困窮とともに当時の我々日本人を困惑させたものであった。教育委員会制度もそのひとつであり、昭和二十七年の施行、市町村教委実施以来今日に至っている。この間、公選制から任命制、学校教育体系の大変革、教育内容の検討整備など幾多の重要問題に遭遇しながら、日本教育の在り方を求め地方自治の確立を目指して、日本の再建のために大きく寄与されたことは、教育行政にかかわった多くの人々の労苦の賜であろうと思われる。

滝川市教育委員会は、昭和二十七年発足以来、常に崇高な理念を持ち、理想実現に向けて学校教育の条件整備に精力的に努力し、昭和三十四年の第一小学校新築校舎着工に始まり、平成二年市立滝川西高等学校の全面改築に至るまで、小中学校の分離又は統合校、新設学校の校舎建設、木造校舎及び老朽校舎等をすべて鉄筋コンクリート構造による近代的設備の整った不燃化校に衣替えを完了させた。更に、生涯学習の重要性に視野を広げた社会教育施設拡充新設は、美術自然史館、陶芸センター、航空科学館、航空科学研修センター、温水プール、サイクリングターミナル等の新設建設は十指に余り、人口五万余の一地方都市としてはまさに驚異的な教育立国をつくりあげた。また永年にわたる滝川市民待望であった大学誘致が、市長をはじめ内外の諸先輩有識者の努力と、大学当局の市に寄せる期待と理解のおかげで國學院女子短期大学の開学がなされ、滝川市生活文化の向上に大きく貢献されつつある。

昭和五十七年、教育委員会設置三十周年、市立学校不燃化達成を祝う記念式典が市民歓喜の中で行われたが、吉岡市長は挨拶の中で、市教育委員会三〇年の歩みと苦難をのりこえた努力を讃えるとともに、市財政逼迫の中にあっても教育の施設整備と適性配置は、教育振興の根幹であるとの考えから、不燃化達成、市教育委員会三十周年、女子短大開学のこのときを「滝川市の教育元年にしよう」と提言した。真に時宜を得た発想であり、三〇年間の諸事を具さに理解され常日ごろからの高邁な理想を単的に、しかも分かりやすく言い表わされ滝川市民にとってのこれから進むべき方向を示し大きな励みとなった。

滝川市立の小・中・高は計一二校であるが、昭和三十八年から昭和五十六年の一八年間において一二校すべてを不燃化校舎に変貌させるということは、市理事者にしても市教育委員会としても神業であるまいかと推測できる御苦労があったと思われる。

「教育元年」は始まりを意味する。施設設備は教育の根幹であるが、更に、教育内容の充実が根幹のもう一つにあることを肝に銘じなければならない。施設設備が生かされるすぐれた中味をもって裏打ちできるよう市教育委員会、学校現場、そして市民の積極的な努力が望まれる。

市教育委員会は、滝川市教育行政の一層の進展を図ることから、

組織運営上の仕組みをあらため、次長制を廃するとともに、昭和六十二年四月従来の学務課、社会教育課を、学校教育部、社会教育部の二部制とした。また、昭和六十二年七月学校教育部、社会教育部、スポーツ振興部の三部制と改変、更に平成二年四月、生涯学習業務の一層の充実と市民の意識化を願い、市教育委員会は社会教育部、社会教育課をそれぞれ生涯学習部、生涯学習課と名称を改め、とかく学校教育中心になりがちであった業務の方向を生涯教育振興へ踏み出し市民の学習する街づくりに邁進している。

各学校においては、昭和六十三年文部省が示した新しい学習指導要領に基づき、その移行措置を含め完全実施のための具体的な作業をすすめ、物質的に豊かな現代の子供たちにとって歪みがちな心の問題を中心に教育内容の充実に努力を傾注している。校舎施設設備の整備を終え、教育現場の努力がそれに相乗して、「滝川教育元年」の質的な進展が期待される。

第一章　学校教育

第一節は下巻に登載

第二節　小学校

滝川第一小学校（一の坂町西二丁目一―七〇）

民間の有志の人々の尽力によって明治二十六年十一月十九日創立認可を得、公立空知尋常小学校として発足した。明治四十一年現在地に移転、校名も公立滝川第一尋常高等小学校と改称した。以来本校は管内学校教育のリーダー的な存在として教育実践の実を挙げ、管内教育実践奨励表彰（昭四六）、北海道立教育研究所協力校（昭五八・五九）、北海道教育実践研究論文入賞（昭六〇）等輝やかしい教育実践を営々として積み重ねてきた。特に、昭和三十年の全道特殊教育研究大会の開催校としての実績を認められてから現在に至るまで、全道的研究大会七回、空知管内以上の研究大会五回を主催し、日常の実践・研究の成果を提示し批正を得、自校のみならず教育振興に寄与してきた。その分野も各教科・道徳・特別活動はもちろん学校給食・学校事務に至る極めて広範囲にわたるものであり、三年に一度のペースによる研究大会開催という脅威的な営みでもある。これは本校教師一人ひとりの高い使命感による情熱的な取り組みによる成果であり滝川第一小の名を今日あらしめている原動力なのであろう。また、昭和五十五年四月、空知においては初の情緒障害児学級を設置し特殊教育の分野に新しい一頁を加えた。

昭和三十九年建築の校舎は年月の経過と共に傷みも激しくなったことから昭和六十三年、大規模改造工事が行われ、前庭の全面舗装、トイレの水洗化、暖房の灯油設備等が併せて完成し、整った学校環境の中で児童は意気さかんに学習活動にとり組んでいる。

昭和五十八年、開校九十周年記念式典を盛大に挙行した。

・現在の状況
　児童数　六二五名　　学級数　二〇（内障害学級二）
　教職員数　三六名
・卒業生数　一五、三五九名
・児童の活躍
　昭和五十七年　全国音楽合奏コンクール全道大会第三位入賞
　昭和六十三年　ＮＨＫ学校音楽コンクール空知大会銅賞
　平成元年　北海道共同募金会表彰
・歴代校長
　三三代　本間　茂（昭五五・四・一～昭五八・三・三一）
　三四代　藤井　直衛（〃五八・四・一～〃六二・三・三一）
　三五代　堤　輝美（〃六二・四・一～現在）

年　度	児童数	教員数	学級数
54	1,021	33	26
55	956	33	27
56	965	34	27
57	923	34	27
58	879	32	25
59	856	32	24
60	833	30	23
61	760	29	22
62	703	28	21
63	649	26	20
平元	625	27	20

滝川第二小学校（滝の川町東一丁目一―四五）

滝川市において最も古い歴史を誇る本校は、屯田兵の子弟教育を目的とし、明治二十三年十二月、滝川南・滝川北の二小学校が創設されたことから滝川市の歴史と歩みを共にし今日に至っている。この間、両校の統合、校舎の焼失再建、校名の改称、補習科の併設、中学校の併置等、多事多端の歩みの中にあって、市勢発展とともに児童数も年々増加し、校舎も老朽化してきたことから校舎改築の必要性に迫られ、昭和五十二年、鉄筋コンクリートの近代校舎に生まれかわった。本校の教育活動もそれに伴って益々活発化し、全道道徳教育研究大会(昭五五)、精薄教育全道研究集会（昭五九）等の大会を開催運営し地域の学校教育進展に寄与した。昭和六十三年には、日ごろの教育実践の成果が認められ、空知教育実践奨励表彰の栄誉に浴した。

滝川第二小学校

平成二年十月二十一日、開校百周年記念式典を奉行した。

・現在の状況、児童数　九〇〇名、学級数　二五(一)教職員　三八名
・卒業生数　七、五八二名
・児童の活躍　昭六三・九　全道ソフトボール大会　準優勝
昭六三・一〇　HTB音楽コンクール最優秀賞
・歴代校長
二三代　高田　富勝（昭五二・四）
二四代　渡辺　玲一（〃五五・三）（昭五五・四）（〃五七・三）
二五代　高田　信一（〃五七・四）（〃六〇・三）
二七代　鎌内　三郎（〃六三・四）（現在）
二六代　細田　長知（〃六〇・四）（〃六三・三）
・施設の整備、
屋内体育館大規模改造　工事予算　二一、〇〇二千円
暖房施設の電気から石油への改造　工事予算　四七、六五六千円

滝川第三小学校（花月町二丁目二―一二）

大正七年四月十九日、滝川第三尋常小学校として八学級編成をもって発足した本校は、地域の発展にともなう周辺事情の変化の著しいことから、所在地が、明神町二丁目、栄町一丁目、そして花月町二丁目と移り変り現在に至っている。この間、二部授業、学校林の設置、通学区域の変更問題（一小、西小、東小との）、校舎新築、障害児学級の開設(言語治療)、グランドの拡張等、七〇年間における様々な事象に即応しながら教育活動をすすめてきた。特に「心のふれあいを大切にする児童の育成をめざす生徒指導」をテーマに継続してきた教育研究が、実践を伴った教育の原点を示すものとして高く評価され、昭和六十一年十二月、空知教育実践奨励表彰の栄誉に輝き、翌六十二年十月、公開研究会を開催し広く実践のようすを公開、内外から高い評価を受けた。これは本校教育にたずさわるものの努力の結果ではあるが、日ごろからPTAを通じて子供たちの活動を具体的にバックアップしてきたスポーツ振興会等の一体的な働きもあるものと考えられる。

・校舎施設の整備
昭和五五年七月　上屋プール完成
同　グランド拡張、南側フェンス完成

昭和六〇年二月　校舎増築（特別教室三、プレイルーム一）
昭和六二年十月　校舎大規模改造

・歴代校長
一八代　今野耕烈（昭五四・四・一～〃五七・三・三一）
一九代　八木澤馨（昭五七・四・一～〃六二・三・三一）
二〇代　山本幸次（昭六二・四・一～平元・三・三一）
二一代　反田　恒（平元・四・一～現在）

・卒業生数　一〇、一六四名

・現　況
児童数　五六六名　学級数　一九（内障害一）
教職員数　三四名

滝川第三小学校言語障害児学級（滝川市幼児ことばの教室）

言語障害児学級では、「その障害の性質及び程度に応じて、これを除去・改善すること」が主な教育内容となっている。従って、児童・生徒は教科領域の指導をその児童・生徒の在籍する学級（学校）の教育課程によって受けながら、障害の除去・改善については言語障害児学級で受けるようになった。これが「通級制」をとっている言語障害児学級のユニークな役割であるが、現在の教育制度では「通級制」はいまだ法的整備がなされず、学級を維持するための「在籍」がとりにくい現状がある。

滝川市においては、昭和五十一年四月に言語障害児学級が開設されたが、学童と同じように幼児も治療指導を受けたいという親や関係者のねがいが認められ、「幼児ことばの教室」が滝川第三小学校に同年十一月併設された。しかし、幼児の言語治療については、国や道のレベルにおける援護制度がないため、その財源は全て市独自の事業として行われている。

教室のあゆみ

昭和五十一年四月一日、滝川市立滝川第三小学校言語障害児学級二学級三定員認可、更に、同年十一月六日、「幼児ことばの教室」が併設され開設した。昭和五十三年六月二十三日、第一回「ことばの誕生会」で十八名の修了生を送り出した（以後、昭和六十二年三月、第十回まで開催）。

昭和五十四年十月九日、早期発見・早期治療の必要性から道立滝川保健所との協議により、三歳児健診（ことばの相談）への協力を始めた。昭和五十五年四月、学級編成替えにより二学級二定員となる。昭和五十七年四月、通級できず待機している幼児のため幼児ことばの教室の職員一名増員され、また通級幼児の安全確保のため「滝川市幼児ことばの教室安全会」が発足した。

昭和六十二年三月十四日、第十回「ことばの誕生会」を開催、修了児一五名を送る。教室開設以来、昭和六十三年度までの通級児数は延べ七二三名、修了児数は一九七名（幼児一一六名、小学生八一名）となっている。

江部乙小学校（江部乙町東十三丁目一四二六―一）

明治二十七年十月十二日、滝川北尋常高等小学校として開校、明治二十九年十二月十一日、北辰尋常高等小学校と改称、江部乙女学校、北辰青年学校の併設など幾多の変遷を重ねた後、昭和四十九年度をもって閉校、旭沢小学校、東陽小学校と統合し、現在地に新校舎を建設、昭和五十年四月一日、「江部乙小学校」として新発足した。以来、人間性豊かな実践力のある子供像を目指して地域と連帯

言語障害児学級の推移

年度別教育相談

年度 / 幼・少	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	計
幼児	30	29	24	21	30	25	41	39	25	24	24	28	33	373
小学生	22	18	2	4	6	3	5	8	2	0	0	3	2	75
計	52	47	26	25	36	28	46	47	27	24	24	31	35	448

年度別修了児数

年度 / 幼・少	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	計
幼児		6	3	3	2	4	17	14	17	17	13	9	11	116
小学生	3	4 (1)	13 (2)	7 (3)	12 (4)	10 (6)	8 (3)	5 (3)	4 (2)	5 (5)	2 (2)	6 (4)	2 (1)	81 (36)
計	3	10	16	10	14	14	25	19	21	22	15	15	13	197

※（　）内は、幼児から継続通報していた者。

年度別通級児数

年度 / 幼・小	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	計
幼児	25	27	26	17	22	29	60	56	56	39	38	36	38	469
小学生	21	28	33	25	29	22	21	19	17	12	7	10	10	254
計	46	55	59	42	51	51	81	75	73	51	45	46	48	723

し、環境整備につとめ幅広い教育活動をすすめている。このことは昭和六十一年度体力づくり優良校として空知教育局長賞の受賞や、昭和六十三年度全道少年読書感想文コンクールにおいて、優秀賞一名、優良賞一名の入賞栄誉を得るなど、子供たちの具体的な活動の成果として表われている。昭和六十年九月、開校十周年記念式典が盛大に行われた。

・施設設備の改善状況
昭和五十六年、排水溝施設（校地内、延五〇〇メートル）
教材園の造成、憩いの森造成、マラソンコースの造成
自校給食用施設設備の新設（調理室、調理用器材、休息室等）
昭和六十年　ブラスバンド用楽器一式（三六人編成）
※開校十周年協賛会の記念事業として寄贈
・現在の状況　児童数　三四七名　学級数一三（内障害学級一）　教職員数　二二名
・卒業生数　一、三一八名
・歴代学校長
初代　森谷　英夫（昭五〇・四・三～五五・三・三一）
二代　棚井　保（昭五五・四・三～五八・三・三一）
三代　三条　純雄（昭五八・四・三～六二・三・三一）
四代　藤根　地久（昭六二・四・三～元・三・三一）
五代　佐々木信尊（平元・四・三～現在）

西小学校（西町六丁目七―一七）

昭和二十三年四月、滝川第一小学校の児童激増による校舎狭隘難と遠距離通学難の解消をねがい、第一小学校滝泉台分教場として発足したが、地域発展が益々すすむに及び、地域住民の永年の願望もあり、西町六丁目の現在地に独立校として新築、昭和三十一年四月一日、「西小学校」として開校した。以来、年ごとの児童増による校舎の増築改修などが行われてきたが、昭和五十六年二月、老朽の甚だしかった木造校舎を不燃化、水洗化の近代校舎に面目一新した。赤い屋根の校舎として親しまれ地域の学び舎として住民に愛されてきた「赤いヤネ」は塔屋としてその姿を残し不屈の魂を象徴する北斗の星のように拓北の気概を基に確かな教育の営みを続けている。

西小学校

昭和六十一年九月には、全道国語教育研究大会の開催校として、本校の研究テーマに沿った文学教材の指導を中心に運営にあたり、参会者に実り多い大会と高く評価された。また、開校以来続けられてきた「西小学校貯蓄組合」（通称子ども銀行）が、堅実な運営と発展的な実績が認められ郵政大臣表彰の栄誉に輝いた。

昭和六十一年十月、開校三十周年記念式典を盛大に挙行した。

・校舎建築
　昭和五十四年一二月、
　普通教室六、男女便所二、教材室等　八一五平方メートル
　昭和五十六年二月
　普通教室一六、特別教室七、給食調理室、玄関、便所、塔屋管理棟等
　四、七二八平方メートル、屋体増築三〇四平方メートル
・児童の活躍
　平成元年、西小学校貯蓄組合、郵政大臣表彰を受く。
　昭和五十五年～昭和六十二年（八年間連続）
　ミニバスケットボールクラブ全道大会に出場
・卒業生数　五、〇八八名
・歴代校長
　七代　本間　鉄男（昭五三・四・一）
　〃五九・三・三一　八代　佐々木盛人（昭五九・四・一）
　九代　中川　力（昭六一・四・一）
　〃六一・三・三一
　平二・三・三一　十代　乳井　宏（平二・四・一）
　現在
・現　況
　児童数　七六三名　学級数　二三（内障害一）
　教職員数　三六名

東栄小学校（東滝川三八九番地）

明治四十年四月一日、幌倉特別教授所として開設されて以来、分教場、独立校、高等学校分校併置そして廃止、東栄中学校との併置校、校名変更、更に併設東栄中学校の閉校等、幾多の変遷を経ながら、昭和六十二年七月開校八十周年の記念式典を挙行するに至った。この間屋内体育館暖房設備の設置（昭和五十四年十二月）、プールの設置（昭和五十七年七月）など施設設備の充実ははかられてきたが、昭和三十八年建設の校舎自体の傷みは甚だしく、平成元年七月、大改修が行われている。その中で注目されるのは下水道敷設とともに、

ランチルームの新設が挙げられる。これからの本校の特色ある教育活動の一環としての給食指導のあり方が期待される。

・児童数　一三一名（六学級）　教職員　一四名
・卒業生数　二、二八七名（大正十一年第四小学校として独立以降）
・歴代校長　一八代　伊藤　正通（昭和五三・四・一～五六・三・三一）
一九代　祖母井孝導（〃五六・四・一～五九・三・三一）
二〇代　中川　力（〃五九・四・一～六一・三・三一）
二一代　坂本　国寿（〃六一・四・一～六三・三・三一）
二二代　深井　旭（〃六三・四・一～平成二・三・三一）
二三代　鈴木　克己（平成二・四・一～現在）

東小学校（文京町二丁目一―一）

市内各小学校の学校規模の適性化と、質的向上をねらい昭和五十三年八月十九日開校した本校は、新設学校創成の意欲のもと、教育内容の強化充実と施設の拡充に力をつくしてきた。

昭和五十六年十二月、肢体不自由児学級開設を洞察したユニークなプレイルーム（二〇万八、六四〇平方メートル）の他、普通教室二、第二音楽室などが増築された。更に、東小学校のシンボルとして鐘楼が建設され「東の鐘」として親しまれ、毎日八時、十六時、十八時にさわやかな鐘の音を地域一帯にひびかせている。

昭和五十八年、日頃の教育実践が評価され「空知管内教育実践奨励校」として表彰され、昭和六十三年開校十周年記念事業として第三十六回全道造形教育研究大会を開催したところである。

・卒業生数　一、二九七名
・児童活動の実績
昭和五四年～昭和五八年、ＮＨＫ全国学校音楽コンクール北海道大会において連続最優秀賞（金賞）を受く。
昭和五九年度、東小少年消防クラブ、優良団体賞受賞
・**学級・児童・教職員数**

年度	学級数	児童数	教職員数
53	18	600	24
54	18	639	24
55	18	683	24
56	20	740	26
57	20	760	26
58	20	762	26
59	20	773	26
60	19	727	25
61	18(1)	679(2)	25
62	17(1)	619(2)	24
63	16(1)	579(2)	23
平元	16(1)	547(2)	23

（　）内は肢体不自由児学級及び人数

・歴代校長　初代　本間　茂（昭和五三・四・一～五九・三・三一）
二代　吉川　昌二（〃五九・四・一～六一・三・三一）
三代　早弓　弘行（〃六一・四・一～平成二・三・三一）
四代　今野　吉満（平成二・四・一～現在）

第三節　中学校

江陵中学校（黄金町西一丁目七―一八）

新教育制度の実施とともに滝川第一中学校として昭和二十二年五月一日開校した本校は、昭和二十六年四月、江陵中学校と改称した。その後、生徒の急増にともなう校舎の狭隘、施設設備の不足、

通学区域の変更、開西中学校の分離新設、校舎の老朽化、新校舎の建築等々、幾多の困難を克服しながら、数多くの研究実践発表、研究大会の開催、あるいは、生徒の活躍による各種大会における抜群の成績は、道内はもとより、全国に江陵中学校の名をとどろかせた。

昭和五十六年十月、第一回北海道体力つくり優良校として選ばれ表彰を受け、昭和六十年二月には、これまでのすぐれた教育実践が極めて高く評価され、北海道教育実践表彰を受けたことは、まさに本校の真価を内外に示したものと云える。

昭和六十二年開校四十周年記念式典を盛大に行った。

・歴代校長

一〇代　若山　良一（昭五三・四・一～〃六〇・三・三一）

一一代　飛鷹　和男（昭六〇・四・一～平元・三・三一）

一二代　山本　幸次（平元・四・一～現在）

・現在の状況

学級数　二一　生徒数　八八〇名　教職員数　四二名

・卒業生数　一四・二七五名

・**生徒の活躍**

年度	全道大会	全国大会
五四	バドミントン（男子）団体、個人複優勝（当番学校） バレーボール（女子）優勝 卓球（女子）団体・個人単優勝	
五五	バトミントン（男子）団体・個人複優勝 バレーボール（女子）優勝 卓球（女子）個人複優勝 合唱クラブ優秀賞 日刊スポーツ賞学校賞受賞	
五六	バレーボール（女子）準優勝 バドミントン（男子）団体・個人複優勝 第一回北海道体力つくり優良学校表彰	バドミントン（男子）団体準優勝
五八	バドミントン（男子）団体・個人複優勝（当番学校）	バドミントン（男子）個人複準優勝
五九	卓球（女子）団体準優勝・個人単優勝 庭球（男子）団体優勝 バドミントン（男子）団体・個人複優勝	バドミントン（男子）団体第三位
六〇	北海道体育協会賞受賞　男子バドミントン部 バドミントン（男子）団体・個人複優勝 吹奏楽合奏コンクール最優秀賞	バドミントン（男子）団体第三位
六一	北海道日刊スポーツ団体賞　男子バドミントン部 卓球（女子）個人単優勝 バドミントン（男子）団体・個人複優勝 吹奏楽合奏コンクール最優秀賞	バドミントン（男子）個人複第三位
	北海道教育美術展奨励賞	

六二	バドミントン（男子）団体・個人複優勝
	吹奏楽合奏コンクール最優秀賞
平元	バドミントン（男子）個人複準優勝

明苑中学校（新町四丁目九―一）

昭和二十二年五月一日、「滝川町立第二中学校」として出発した本校は、昭和五十五年度に東栄中学校と統合することとなり、それを機に永年の懸案であった狭隘な敷地と老朽化の激しい校舎の問題解決をはかることになり、現在地に近代的な校舎が建設された。建設地選定については、生徒の通学問題ともかかわって細かい論議検討がなされ通学バス運行導入と併せて決定された。

昭和五十五年四月統合開校、同年五月校舎落成式を行い、名実ともに新生「明苑中学校」が発足した。このことを機会として、昭和五十九年度精薄教育全道研究大会、昭和六十二年度全道特別活動研究大会の会場校として研究実践の成果を問い高く評価された。更に障害児教育充実の一環として、昭和五十七年十月情緒障害学級の開設（一学級）、平成元年四月肢体不自由児学級が開設（一学級）されたことにより、在来の精薄学級とともにきめ細かな教育活動が行なわれるようになった。平成元年十月十五日開校十周年記念式の挙行ともどもいっそうの進展が期待される。

・卒業生数　七、五九一名（旧明苑中五、四三〇、統合後二、一六一）

・生徒活動の栄誉

昭六〇年度　サッカー部全道大会準優勝（全国大会出場）

昭六三年度　バスケット部全道大会優勝（全国大会出場）

吹奏楽部全道大会金賞（昭五八・五九・六一・六三・平元）

・歴代校長　初代　山田喜千代　昭和五五・四・一　〃　五七・三・三一

二代　西沢　秀男　〃　五七・四・一　〃　五九・三・三一

三代　稲童丸　優　昭和五九・四・一　〃　五九・一一・一二

四代　川原　勝　〃　五九・一二・一　〃　六二・五・三一

五代　酒井　隆　〃　六二・六・一　現在

・現在の状況

生徒数　七四二名　学級数　二一（内障害三）

教職員数　四一名

東栄中学校

昭和二十二年五月一日、「滝川町立第二中学校分校」として発足、昭和二十六年四月一日東栄中学校と改称昭和五十二年九月、開校三十周年記念を迎え、いっそうの充実発展を期し努力してきたところであったが、近年の過疎化の波により生徒数も減少したことから明苑中学校との合併統合を行うことになり、昭和五十五年三月二十二日閉校式を行い、同年三月三十一日をもって三三年間の東栄中学校の歴史を閉じ、昭和五十五年四月一日、明苑中学校と統合した。

・卒業生数　一、二六二名

・歴代校長　一〇代　堀江　三郎　昭和五二・四・一　〃　五五・三・三一

開西中学校（西町三丁目七―一二）

校舎狭隘に悩む江陵中学校の緩和策として、昭和三十七年四月一日分離し新設校として開校した。

開西中学校

開校以来、豊かな情操を身につけた逞しい人づくりを経営の基本として、地域父母と一体となった教育活動を推進してきた。殊に、環境づくりには意を用い、校庭の整備を中心に花壇造成に力を注いでいる。市民憲章推進委員会主催の「花いっぱいコンクール」では、学校部門において最優秀賞を連続獲得し、明るい学校生活が営まれるよう全校あげての活動は注目されている。

・生徒の活躍
昭和五十六年　北海道読書感想文コンクール　優秀賞
昭和六十一年　全道吹奏楽コンクールB編成の部　銀賞
昭和六十二年　全道吹奏楽コンクールC編成の部　金賞
昭和六十三年　全道アンサンブルコンクール　金賞
青少年読書感想文コンクール　道立図書館長賞

・現在の状況
生徒数　四六九名　学級数　一二　教職員数　二七名
・卒業生総数　四、三七三名
・歴代校長
五代　小野　武男（昭四八・四・一〜〃四九・三）
六代　綱淵　正幸（昭四九・三・一〇〜〃四九・三・三一）
七代　山本　定雄（〃四九・四・一〜〃五三・三・三一）
八代　吉田　善男（〃五三・四・一〜〃五七・三・三一）
九代　道仏　文夫（〃五七・四・一〜〃六一・三・三一）
一〇代　鈴木　健治（〃六一・四・一〜平元・三・三一）
一一代　須田　要一（〃平元・四・一〜現在）

江部乙中学校（江部乙町西十三丁目二―一）

昭和四十四年四月、北辰・東陽の二中学校を統合し開校した本校は、市町合併により昭和四十六年四月、滝川市立江部乙中学校と改称した。昭和五十五年、開校十周年の記念事業により吹奏楽用楽器の充足、屋内体育館用スピーカーの完備等が行われた。昭和五十七年一月二十日、在来の給食センターが廃止されたが、その事を見越しての給食調理室をはじめ内部施設の増築、設置工事が完了したことから、自校単独による完全給食実施の第一歩を踏み出した。

翌五十八年からは、明治の大先達岩橋英遠画伯の母校へ寄せる温かい支援をうけて、校地内の整備に力を注ぎ、桜の苗木、オンコ、ニオイヒバ等の植樹を毎年行い、緑豊かな江部乙中学校づくりに努力している。

また、地域に根ざした教育実践をモットーにした本校は、勤労体験学習として「稲のはさ掛け」に全校生徒が参加し、農家の作業に直接汗を流す中から屯田兵の開拓魂を学び、援農奉仕活動を通してボランティア精神を身につけられるよう、地域にひびき合う創造的な教育活動の展開は内外から注目されているところである。

・卒業生数　二、二三六名

・現在の状況

生徒数　二四三名、学級数　七、教職員数　一八名

・歴代校長

三代　西沢　秀男（昭五二・四・一～〃五五・三・三一）
四代　高田　信一（〃五五・四・一～〃五七・三・三一）
五代　佐藤　亮三（〃五七・四・一～〃六〇・三・三一）
六代　阿部　隆（〃六〇・四・一～〃六三・三・三一）
七代　穴木沢　洵（〃六三・四・一～平二・三・三一）
八代　大垣内一郎（平二・四・一～現在）

・**生徒の活躍**

年度	全道大会	全国大会
五五	全道中体連バレーボール大会男子優勝 同　陸上競技　女子一〇〇メートル三位入賞 女子三種A六位入賞	全国中体連バレーボール大会出場（男子）
五六	全道中体連バレーボール大会男子準優勝 同　陸上競技　女子一〇〇メートル四位入賞 女子二〇〇メートル五位入賞	全国中体連バレーボール大会出場（男子）
五八	全道中体連陸上競技大会 一年男子　一五〇〇メートル　三位入賞 全道中体連バレーボール大会男子三位入賞	
五九	全道テニスインドア大会男子個人優勝 全道陸上大会男子八〇〇メートルリレー　三位入賞 二年男子二〇〇メートル二位入賞 北海道教育美術展奨励賞	全国少年新春書道展入選（女子）
六〇	アンサンブル全道大会出場　金賞受賞 テニスインドア全道大会出場　男子個人三位入賞 全日本打楽器フェスティバル北海道大会 クラリネット部門金賞 トロンボーン部門銀賞	
六一	北海道教育美術展奨励賞 全道中体連テニス大会　男子団体三位入賞 全道インドアテニス大会　三位入賞（男子個人） 全道中学校英語暗唱大会　六位入賞	全国陸上選手権大会出場（男子一〇〇メートル）
六二	全道インドアテニス大会二位入賞（男子個人） 全道中体連テニス大会男子個人優勝	全国中体連テニス大会出場（男子個人）

第四節　高等学校

滝川工業高等学校（二の坂町西一丁目一～五）

庁立滝川中学校として大正九年創立以来、幾多の困難を克服し、名実ともに整った中学校として道内にその名を知られていたが、終戦後の学校制度の改正により、道立滝川高等学校（昭和二十三年）、道立滝川西高等学校（昭和二十五年）、そして、道立滝川工業高等学校（昭和二十九年）と、校名の改称、男女共学問題、工業・普通課程の併課、通学区域問題等々、複雑な変遷をたどりながらの苦難の歩みを続けてきた。しかし、日本の経済事情が安定し、科学技術の進展は、工業高等学校の重要性が再認識され、本校の教育活動も活発化し、生徒の努力と相俟って有能な士を道内外に数多く送り出してき

た。

昭和五十五年には定時制課程廃止という事態を迎えたが、創立六十周年の節目とあって盛大な記念式典を挙げ一層の発展を期した。

その後、校舎・施設の整備・充実に努めると共に、米国アラスカ州トージアック校との姉妹校提携による交流で生徒の視野を拡げ、平成元年度には全道高等学校工業教育研究集会開催校になるなど、工業高校としての充実に万全を期して教育を推進している。

道内八番目の中学校として開校した本校の名誉ある伝統は、今なお脈々として受け継がれて生徒の向上心につながり、産業各界からも大きな期待が寄せられている。平成二年十月には創立七十周年記念式典が盛大に挙行されているが、道教委の間口減方針で、平成三年度から工業化学科の募集停止となったことは残念なことである。

・校舎施設の整備

昭和五五・一二・六　柔剣道場新築竣工
昭和五七・三・一　屋内体育館改築竣工
昭和五九・一一・二　旧校舎跡地記念碑建立（一の坂町西三）
昭和六一・一一・二九　水泳プール新設完成

・生徒の活躍

本校の生徒の部活動は昔から盛んに行われていたが、近年におけるその成果は主として次のようなものがあり、滝工の名は、全国にひびき渡っている（全国大会出場分）。

バドミントン部　団体　昭五六、六一、六二、六三
　　個人　昭六一、六二、六三、平元
※全国選抜大会において、個人戦シングル準優勝（桜井敬大）
ボクシング部（個人のみ）　昭五五、六〇、六一、六二、六三、平元
※昭六三年、ライトミドル級において五位入賞（高橋幸彦）
カヌー（国民体育大会）　昭六一、六二、平元（カヤックペア三〇〇米五位入賞佐藤）

・歴代校長

十五代　大村　正道　昭五三・四・一～昭五六・三・三一
十六代　高岡　伸侑　昭五六・四・一～昭五九・三・三一
十七代　寺谷　広安　昭五九・四・一～昭六三・三・三一
十八代　三田　宏　昭六三・四・一～平成二・三・三一
十九代　柚原　秀明　平成二・四・一～現在

・**入学数及び卒業数**

年度	入学 工業化学科	入学 土木科	入学 電気科	入学 機械科	入学 計	卒業 工業化学科	卒業 土木科	卒業 電気科	卒業 機械科	卒業 計
	(40)	(40)	(40)	(80)						
54	40	41	40	80	201	32	33	35	75	175
55	34	40	40	80	194	29	35	34	75	173
56	40	41	40	80	201	35	36	40	78	189
57	40	40	40	74	194	28	37	40	74	179
58	27	40	40	78	185	31	34	37	75	177
59	40	39	40	80	199	33	35	35	68	171
60	40	40	40	72	192	21	30	40	69	160
61	40	40	40	80	200	28	31	40	73	172
62	39	40	40	78	197	35	34	40	69	178
63	40	40	40	80	200	38	37	40	76	191
平1	38	40	40	73	195	38	39	40	73	190

滝川高等学校（緑町四丁目五―七七）

滝川高女校章

・沿革と校章の由来

本校は昭和四年に開校し、滝川高等女学校と称した。当時の校章（胸章）は、「鏡」の形の中に「白百合」と「空知・石狩」の二流を配し、優雅、純一、

潔白、そして努力、精進を表わした。この「白百合」は、現在女子生徒の腕章として受け継がれている。昭和二十三年、学制改革で滝川女子高等学校と改称したが校章はそのままであった。同年、定時制課程が設置された。

滝川東高校章

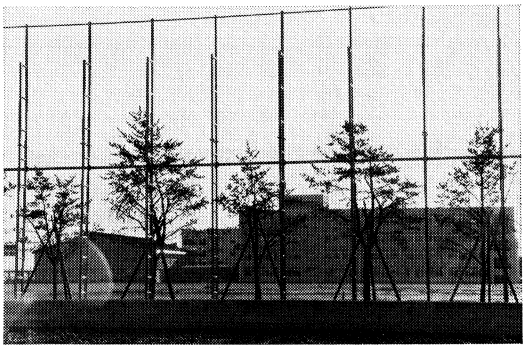
昭和二十五年、男女共学、通学区域変更が実施され、当時の滝川高等学校(現工業高校)と滝川女子高等学校の生徒は、国道十二号線を境界として東西に分かれ、本校は滝川東高等学校と改称された。東高時代の校章は「桜の花びら」を輪で囲み、「川」の三本と「高」の字を配したものであった。

昭和二十九年、滝川東、西高等学校の普通科統合により、本校は「滝川高等学校」と改称され、校章は東西両校統合を表わす「E」と「W」の字を組み合わせ、滝川の「T」を浮き立たせたものに変わり今日に至っている。なお、「桜の花びら」は、東高以来の伝統を受け継いでいるものである。

昭和四十五年度から理数科一学級が設置され、普通科七学級と合わせ現在二四学級の規模で教育活動が営まれている。本校生徒は、極めて学業意欲が旺盛であり、向上心豊かで文化、体育面における活躍は目覚しいものがある。昭和六十三年、空知管内教育実践表彰の栄誉を受けた。

・校舎施設の改善

本校は、昭和四年十二月現在地に校舎を新設した。その後、図書館(昭二九)、音楽室(昭三三)、新校舎一部建築(昭三〇、三五)等々、部分的に改築、新築等の整備はすすめられたが、木造部分の老朽甚だしく、昭和四十四年から三年計画による改築工事が施され、昭和四十六年三月、現在の鉄筋コンクリート四階建校舎の完成をみた。また、特別教室棟(木造)の改築は、平成元年一月一期工事が完了した。



滝川高等学校

・卒業生数(平成元年三月末現在)

滝川高等女学校	本科	一、七〇四名
同	補習科	八二名
同	併置中学校	三九九名
滝川女子高等学校		四四名
滝川東高等学校	全日制	七六二名
同	定時制	一八四名
滝川高等学校		
	全日制普通科	八、四一六名
	同　理数科	二八〇名
	定時制普通科	九四二名

・最近の入・卒状況

全日制	
理数科	計
40	358
43	366
40	355
35	339
39	351
40	350
40	349
41	348
39	349
41	360
40	353

・卒業生進路状況（平成元年三月卒業）

〔進　　路〕

進路別＼性別	男	女	計
大学進学	91	33	124
短期大学進学	5	44	49
就職	15	11	26
就職進学	1	0	1
各種学校進学	12	30	42
その他	87	11	98
計	211	129	340

（卒業数はその年の三月末）

年度	入学 定時制 普通科	入学 定時制 計	入学 普通科	卒業 定時制 普通科	卒業 定時制 計	卒業 全日制 普通科	卒業 全日制 理数科	卒業 全日制 計
54	12	12	318	16	16	307	37	344
55	21	21	323	10	10	302	24	326
56	12	12	315	21	21	310	41	351
57	14	14	304	13	13	313	39	352
58	8	8	312	8	8	322	41	363
59	14	14	310	12	12	306	39	345
60	6	6	309	12	12	295	34	329
61	25	25	307	7	7	305	38	343
62	34	34	310	9	9	298	40	338
63	21	21	319	15	15	305	36	341
平1	31	31	313	11	11	298	42	340

・生徒の活躍実績

区分	大会種別	当該年度
吹奏楽	学校合奏コンクール全国大会優良校受賞	54、55、57、59、61
放送	NHK全国放送大会朗読部門出場	54、55、57、59、62
同	ラジオ文芸部門出場	54
同	アナウンサー部門出場	55、61
同	ラジオ自由部門出場	62
音楽	NHK学校音楽コンクール全国大会出場	54、55
同	優秀校受賞	59
高文連全国大会出場		61
合唱	全日本合唱コンクール全国大会出場	57
羽球	全国高等学校選抜大会出場（男子）	56
同	高校総体全国大会出場（女子複）	58
同	（男子単）	61

〔就　職　内　訳〕

産業別＼性別	男	女	計
公務	9	4	13
卸小売	2	2	4
製造	1	0	1
建設	1	1	2
金融保険	0	3	3
サービス	2	1	3
その他	0	0	0
計	15	11	26

美術	高文連全国大会出場	63
スキー	全国高校スキー全国大会出場	59、62
カヌー	高校総体全国大会出場	63
	国民体育大会全国大会出場	63、平元
水泳	高校総体全国大会出場（飛込み）	62
	国民体育大会全国大会出場（同右）	62、63
なぎなた	国民体育大会全国大会出場	62、63

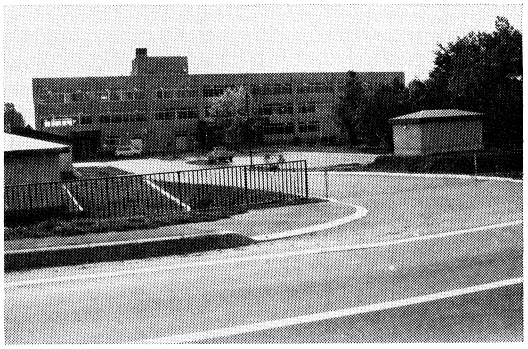
※平元国体カヌー、カヤックフォア　少年男子五百米第一位、三百米第三位入賞（いずれも滝高　吉田）

・歴代校長

一四代　加藤　花男（昭五二・四・一～〃五五・三・三一）
一五代　江口　弘（〃五五・四・一～〃五八・三・三一）
一六代　谷山　治夫（〃五八・四・一～〃六〇・三・三一）
一七代　油井　俊（〃六〇・四・一～〃六二・三・三一）
一八代　中土井　昭（〃六二・四・一～平元・三・三一）
一九代　遠藤　隆（平元・四・一～現在）

滝川北高等学校（江部乙町東十一丁目一一一八―一）

昭和二十一年四月、江部乙村立北辰農業学校として発足した本校は、昭和二十三年、江部乙農業高等学校と改称、現在地に校舎も完成した。農村を基盤に農業後継者の育成を本旨として教育内容の充実をはかってきたが、経営基盤の確立という課題解決をねがい、道立移管への努力を続け昭和三十二年、開校十周年と道立移管記念式典を行った。その後、定時制の募集停止・閉課、家政科、園芸科、被服科の設置、農業科の募集停止等、社会構造の急速な変化と進展にもまれながら、昭和五十三年四月一日、滝川北高等学校と改称、園芸科、被服科の募集停止とともに、全日制課程普通科（一間口）を設置、昭和五十八年には普通科三間口の単置校となって大きく変貌し発展をとげた。



滝川北高等学校

昭和五十四年、屋内体育館、生徒玄関の改築竣工に伴い、この年一月に発足した「校舎改築期成会」により、本校校舎の全面改築へ向けての要請陳情行動が行われ、その結果、昭和六十年から三年がかり、総工費一〇億円余をかけた近代校舎の完成をみ、昭和六十二年十月二十四日、関係者全ての喜びの中に校舎落成記念式典が挙行された。この間、永年の課題になっていた女子生徒の制服改正を、生徒主導の中で検討が加えられ、六十二年度入学生から新しい制服を着用し、北高生としての意識改革に取り組んでいる。

生徒活動は広範囲に行われているが、家庭クラブの活動は特に活発でその実績は道内外に広く認識されている。特に昭和五十八年か

ら三年間にわたり全道家庭クラブ研究大会最優秀賞を連続獲得、昭和六十一年、六十二年の同科学賞、努力賞と続き、昭和六十三年には、全国高等学校家庭クラブ連盟主催の「全国高校生ホームプロジェクトコンクール」において、応募八七〇〇余名の中から、優秀賞（三年、白鳥　栄）の成果となって表われたのは特筆される。

・卒業生総数　四、四三九名

内訳			
定時制普通科	一四	（昭二八年度で閉科）	
同　農業科	三三一	（同三七年度で閉科）	
全日制農業科	七九四	（同四一年度で閉科）	
同　園芸科	四三六	（同五四年度で閉科）	
同　被服科	三六八	（同五四年度で閉科）	
同　家政科一、九〇七		（同五七年度で閉科）	
同　普通科	五八九		

・記念碑及び碑文

新校舎落成にあたり、滝川北高の創立の精神と屯田兵からの開拓魂とをリンゴ園風景に込め、滝川北高に学ぶ生徒に、先達の精神が長く心に刻まれることを願って陶板壁画としたもので、生徒玄関前の庭に建立された。壁画は屯田焼きで知られる陶芸家、清水省次によって制作されたものである。

碑文

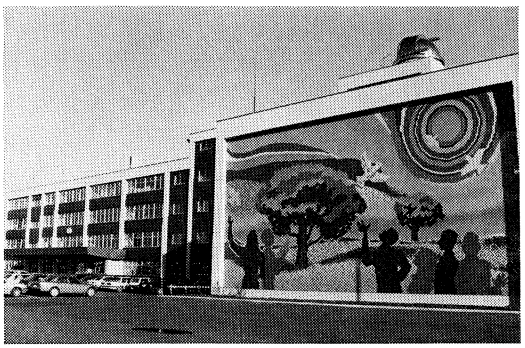
本校は昭和二十一年北辰農業学校として創設されましたが、時代の変遷により昭和五十八年度からは普通科単置校となり、昭和六十年懸案の校舎の全面改築が開始され同六十二年十月二十四日校舎改築落成記念式典を挙行することができました。

旧い学び舎の面影を偲ぶとともに、本校の創立の精神と屯田兵からの開拓魂の象徴として、林檎園風景を陶板に焼きあげました。

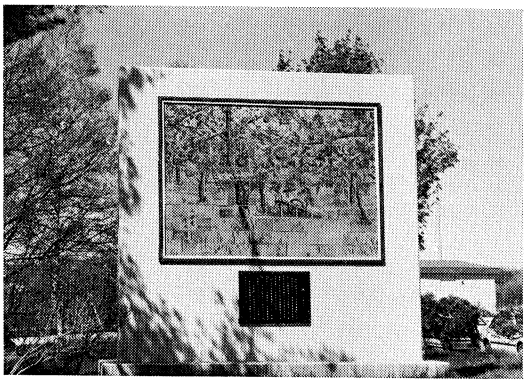
樹齢数十年を経たストローブ松の隣にどっしりと腰を据えた記念碑の象徴する精神は、滝川北高等学校に学ぶ生徒の心に深く刻まれていくことでしょう。

・歴代校長

九代	中原　勝郎	（昭五二・四・一～〃五五・三・三一）
一〇代	新江　政義	（〃五五・四・一～〃五八・三・三一）
一一代	小松　一郎	（〃五八・四・一～〃六〇・三・三一）
一二代	中村　博	（〃六〇・四・一～〃六二・三・三一）
一三代	岡田　珠子	（〃六二・四・一～平元・三・三一）
一四代	森永　嘉重	（〃元・四・一～〃二・三・三一）
一五代	庵　哲二	（〃二・四・一～現在）



滝川西高等学校



北高新校舎落成記念碑

滝川西高等学校（西町六丁目三―一）

「校訓」

『志ある者は事ついに成る』

昭和四十八年四月一日をもって市立に移管され、滝川西高等学校の校名のもと新発足した本校について滝川市は、

地域社会の期待にこたえる有為な青少年育成をめざし、普通科・商業科の併設校としての教育内容の充実に即応すべく、施設設備の充実に全力を傾注してきた。施設関係では、校舎の改築(昭五七)、テニスコートの増設(昭五九)、校舎増築(昭五九)、屋内体育館の増改築(昭六三)、特別教室の改築(平成元年)等と矢つぎ早やに工事をおこし完成、更に設備関係では、タイプライター等の購入一六台(昭五四)、LL機器一式の更新(昭五五)、パソコンの導入四四台(昭五八～平成元)、吹奏楽用楽器の購入及び更新(昭五八～平成元)等多岐にわたり整備し、特色ある教育活動に有用されている。従って生徒の活力に満ちた自主活動は極めて活発で、昭和六十三年夏の甲子園大会に野球部が初出場を果したのをはじめ、全道・全国大会への各部の出場は体育関係のみならず、文化部門においても枚挙にいとまがないほどである。

・生徒の活躍（全国大会）

区分	大会種別	当該年度
弁論	全国高等学校総合文化祭弁論部門出場	55、56
書道	同　書道部門出品	60、61、63
陸上競技	全国高等学校陸上競技選手権大会出場	54、56、60、61、62、63、平元
	国民体育大会全国大会出場	60、61、62、63
ソフトボール	全国高等学校ソフトボール選手権大会出場	60
野球	同　野球選手権大会出場（甲子園）	63
バドミントン	同　バドミントン選手権大会出場	54、55
カヌー	国民体育大会全国大会出場	元61、62、63、平

※平元国体カヌー、少年男子カヤックペア三百米第五位入賞（袴田）

・進路状況（平成元年三月卒）

科別 / 性別 / 種別	商業科 男	商業科 女	普通科 男	普通科 女	計
卒業生数	35	140	94	75	344
※　就職	19	111	20	16	166
進学　大学	4	0	18	1	23
進学　短大	0	5	2	24	31
進学　各種	10	19	36	26	91
その他	2	5	18	8	33
計	35	140	94	75	344

・就職内訳（※分）

〔職業分類〕

職業別 / 科別	商業科	普通科
事務	75	18
販売	19	4
サービス	18	10
運・通	0	0
保安	1	3
技能	17	1
その他	0	0
計	130	36

〔地域分類〕

区分 / 科別	商業科	普通科
市内	84	21
管内	17	1
札幌	15	3
道内	4	4
道外	10	7
計	130	36

・卒業生数

私立滝川商業高等学校　五、一三七名

滝川西高等学校　普通科　一、一六〇名

商業科　三、二六三名

・最近の入学・卒業生の推移

入学			年度	卒業		
商業科	普通科	計		商業科	普通科	計
169	91	260	五四	175	84	254
178	94	272	五五	181	96	277
183	89	272	五六	160	87	247
184	79	263	五七	173	86	259
180	178	358	五八	167	88	255
184	138	322	五九	164	78	242
182	180	362	六〇	171	168	339
184	181	365	六一	174	128	302
185	173	358	六二	168	176	344
184	181	365	六三	175	169	344
180	173	353	平元	177	177	354

・歴代校長

初代　佐々木　明（昭四八・四・一～〃五三・三・三一）

二代　小森　文夫（〃五三・四・一～〃五六・三・三一）

三代　樋口　隆士（〃五六・四・一～〃五九・三・三一）

四代　高橋　豊（〃五九・四・一～〃六〇・一・三〇）

五代　柏原　敏之（〃六〇・一・一～平二・三・三一）

六代　大島　巌（現〃二・四・一～在）

第五節　その他

父母と先生の会・後援会の歴代会長

○滝川第一小学校ＰＴＡ

一七代　中川日出吉（昭五四年度～〃五五〃）

一八代　石黒　直（昭五六年度～〃五七〃）

一九代　少覺三千宏（〃五八〃～〃）

二〇代　清水　但男（〃五九〃～〃六〇〃）

二一代　宇山　昌宏（〃六一〃～〃）

二二代　柳　承治（〃六二〃～〃）

二三代　坂田　秀昭（〃六三〃～平元〃）

二四代　川口　義弘（平二〃～現在）

○滝川第二小学校ＰＴＡ

一七代　尾崎　勉（昭五四年度～〃五五〃）

一八代　赤川　昌弥（昭五六年度～〃五七〃）

一九代　筧下　恭久（〃五八〃～〃五九〃）

二〇代　西谷　俊一（〃六〇〃～〃）

二一代　堀田　健司（〃六一〃～〃六二〃）

二二代　伊藤　幸三（〃六三〃～現在）

○滝川第三小学校ＰＴＡ

一九代　居林　幹生（昭五三年度～〃五四〃）
二一代　中谷　幸司（〃五七～〃五八〃）
二三代　藤井　哲也（〃六一～〃六二〃）
二五代　松本　義彦（平二〃～現在）

○西小学校ＰＴＡ

九代　渡部　豊道（昭五二年度～〃五四〃）
一一代　本山　英治（〃五七～〃五八〃）
一三代　鈴木　武道（〃六一～〃六三〃）
一五代　砂原　一仁（平二〃～現在）

○東栄小学校ＰＴＡ

一五代　米田　裕記（昭五四年度～〃五五〃）
一七代　坂田　和友（〃六二～平元〃）

○東小学校ＰＴＡ

初代　林　喜久男（昭五三年度～〃五七〃）
三代　今野　義一（〃五九～〃）
五代　細田　光人（平成元年度～現在）

○江部乙小学校ＰＴＡ

二代　寺崎　雅聰（昭五四年度～〃五六〃）
四代　中村　稔（〃五九～〃六〇〃）
六代　杉山　博志（〃六三～平元〃）

○江陵中学校ＰＴＡ

二〇代　神部　和典（昭五五年度～〃五六〃）
二二代　宮崎　次郎（〃五九～〃六〇〃）
二四代　松尾　政徳（〃六三～平元〃）

一〇代　水林　広（昭五五年度～〃五六〃）
一二代　山内　康裕（〃五九～〃六〇〃）
一四代　平野　富康（平成元～〃）

一六代　井上　正雄（昭五六年度～〃六一〃）
一八代　内野　博行（平二〃～現在）

二代　加我　敏之（昭五八年度～）
四代　笹木　和幸（〃六〇～〃六三〃）

三代　橋本　勝義（昭五七年度～〃五八〃）
五代　大川　稔（〃六一～〃六二〃）
七代　榎本　雅史（平二〃～現在）

一六代　坪田　巧（昭五一年度～〃五四〃）
一八代　辻奥　功（〃五七～〃五八〃）
二〇代　山下　正幸（〃六一～〃六二〃）
二二代　山本　毅（平二〃～現在）

○明苑中学校ＰＴＡ

初代　佐藤　圭二（昭五五年度～〃五六〃）
三代　中田　翼（〃五九～〃六〇〃）
五代　中川　一郎（〃六三～〃）
七代　笹木　和幸（平二〃～現在）

○開西中学校ＰＴＡ

一〇代　毎原　政夫（昭五三年度～〃五五〃）
一二代　水林　広（〃五八～〃五九〃）
一四代　引地　健夫（〃六一～〃六三〃）

○江部乙中学校ＰＴＡ

九代　長谷川郁夫（昭五四年度～〃五五〃）
一一代　工藤　永二（〃五七～〃五九〃）
一三代　森本　茂雄（〃六二～〃六三〃）

○滝川高等学校ＰＴＡ

二〇代　武内　敏彦（昭五四年度～〃五五〃）
二二代　田島　隆男（〃五九～〃六〇〃）
二四代　中谷　幸司（平成元年度～現在）

一七代　高嶋　晃寛（昭五五年度～〃五六〃）
一九代　中川日出吉（〃五九～〃六〇〃）
二一代　田中　豊（〃六三～平元〃）

二代　藤井　謙和（昭五七年度～〃五八〃）
四代　塩尻　一郎（〃六一～〃六二〃）
六代　今野　義一（平成元年度～）

一一代　深田　義勝（昭五六年度～〃五七〃）
一三代　香川　弘光（〃六〇～）
一五代　水谷　敬（平成元年度～現在）

一〇代　和田　周吉（昭五六年度～）
一二代　岡崎日出松（〃六〇～〃六一〃）
一四代　古家　洋（平成元年度～現在）

二一代　川嶋慎之輔（昭五六年度～〃五八〃）
二三代　佐藤　圭二（〃六一～〃六三〃）

○滝川工業高等学校ＰＴＡ

一二代　中村　正直（昭四四年度〜五六〜）　一三代　峯村　憲一（昭五七年度）
一四代　本野　俊雄（〜五八〜）　一五代　西井　勝明（〜五九〜〜六一〜）
一六代　千田　久（〜六二〜）　一七代　土井　康弘（〜六三〜〜元〜）
一八代　加藤　定幸（平二〜現在）

○滝川北高等学校ＰＴＡ

一六代　下　幸二　一七代　久松　文雄
一八代　高田　正春　一九代　西野　正之
二〇代　松平　隆　二一代　工藤　永二
二二代　岡崎日出松

○滝川西高等学校ＰＴＡ

三代　森　憲明（昭五三年度〜五七〜）　四代　渡部　豊道（昭五八年度）
五代　和田　周吉（〜五九〜〜六〇〜）　六代　藤井　謙和（〜六一〜）
七代　中川日出吉（〜六二〜〜六三〜）　八代　和作　康市（平元〜現在）

○滝川市立おおぞら幼稚園ＰＴＡ

初代　山内　康裕（昭五二年度）　二代　秋山　紀勝（昭五三年度）
三代　浦部　憲正（〜五四〜）　四代　広森　弘志（〜五五〜〜五六〜）
五代　早坂　洋治（〜五七〜）　六代　山内　康裕（〜五八〜）
七代　石黒　安雅（〜五九〜）　八代　平野　富康（〜六〇〜）
九代　砂原　一仁（〜六一〜）　一〇代　三井　茂義（〜六二〜）
一一代　石黒　安雅（〜六三〜）　一二代　坂本　泰史（平元〜現在）

○滝川市立みずほ幼稚園父母の会

初代　内野　正則（昭五七年度）　二代　先田　昭（昭五八年度）
三代　三浦　靖明（昭五九年度）　四代　松原　章（昭六〇年度）
五代　井上　祐一（〜六一〜）　六代　上野　薫（〜六二〜）
七代　松井　雅昭（〜六三〜）　八代　畑　雅浩（平元〜）

○私立滝川白樺幼稚園後援会

一〇代　八幡　吉宣（昭五五年度）　一一代　柳　弘治（昭五六年度）
一二代　田中　豊（〜五七〜）　一三代　大谷　豊（〜五八〜）
一四代　保田　勝滋（〜五九〜）　一五代　鈴木　英光（〜六〇〜）
一六代　古瀬　万敬（〜六一〜）　一七代　西田　洋一（〜六二〜〜六三〜）
一八代　安彦　良一（平元〜現在）

○私立滝川幼稚園後援会

二七代　今野　義一（昭五五年度）　二八代　及川　喜三（昭五六年度）
二九代　中島　均（〜五七〜）　三〇代　柳　承治（〜五八〜）
三一代　三木　典明（〜五九〜）　三二代　上田　英二（〜六〇〜）
三三代　中田　慎（〜六一〜）　三四代　村太　秀直（〜六二〜）
三五代　滝川　俊一（〜六三〜）　三六代　岡部　一三（平元〜）

○私立えべおつ幼稚園後援会

初代　進藤　正雄（昭三八・九・一〜四八・三・三一）　二代　高橋末治郎（昭四八・四・一〜現在）

滝川市父母と先生の会連合会

市内小学校(七)、中学校(四)、高等学校(四)の計一五の単位ＰＴＡが市内児童生徒の健全な成長を願い当連合会に結集し、各単Ｐの自主性を尊重し緊密な連携のもとに各種の事業の実施を通し、会員の研修、児童生徒の福祉の増進、教育条件の改善整備等、側面から市内教育の振興にあたっている。

・平成二年度の会員数　七、五五五名
・同　予算総額　八三五、三五四円

・同　事業計画
①第十五回滝川市ＰＴＡ研究大会の開催
②中空知Ｐ連研究大会への参加
③空知Ｐ連指導者・母親研修会への参加
④北海道ＰＴＡ研究大会への参加
⑤市内単位ＰＴＡ会長懇談会の開催
⑥滝川市母子座談会の主催

・歴代会長
一九代　寺崎　雅聰（江部乙小）昭和五五年度
二〇代　林　喜久男（東　　小）〃　五六〃
二一代　和田　周吉（江部乙中）〃　五七〃
二二代　本山　英治（西　　小）〃　五八〃
二三代　宮崎　次郎（滝　三　小）〃　五九〃
二四代　香川　弘光（開　西　中）〃　六〇〃
二五代　堀田　健司（滝　二　小）〃　六一〃
二六代　柳　承治（滝　一　小）〃　六二〃
二七代　中川　一郎（明　苑　中）〃　六三〃
二八代　坂田　和友（東　栄　小）平成元年度
二九代　山本　毅（江　陵　中）〃　二〃

特学等の育成後援団体

滝川市手をつなぐ親の会

昭和三十九年発足した本会は、障害をもつ児童生徒の教育がより行き届き充実したものになるよう側面から協力活動を続けてきた。近年、障害者の重度重複多様化に伴い滝川市においても知恵遅れのみでなく、言語障害、情緒障害、肢体不自由と四部門障害児教育の学級開設・条件整備を図ってきた。

本会は、これらの障害児教育が本来のねらいを充分に果たせるよう、社会復帰への可能性を願いながら助成活動を続けている。

その事業内容は、①障害児教育の内容充実を促進する。②各種行事への助成（宿泊訓練、社会見学等）、③一般市民への啓蒙と会員募集（会報発行、指導誌の発刊など）、④会員の研修（講師を招いての講演会の開催、会員の施設見学等）があり、会の経費は、すべて会費によって賄われている。

組織は、会長（事務局担当のＰＴＡ会長）、副会長（各小中学校ＰＴＡ会長、各小中学校長）、評議員（各小中学校ＰＴＡ会員、正会員）があり、会員は、各校ＰＴＡ会員及び趣旨に賛同する一般市民・団体などで組織されている。

・歴代会長
三代　昭和五四年度　渡部　豊道（西小ＰＴＡ会長）
四代　昭和五五年度　水林　広（　〃　）
五代　昭和五六年度　神部　和典（三小ＰＴＡ会長）
六代　昭和五七年度　中谷　幸司（　〃　）
七代　昭和五八年度　橋本　勝義（江部乙小ＰＴＡ会長）
八代　昭和五九年度　中村　稔（　〃　）
九代　昭和六〇年度　中川日出吉（江陵中ＰＴＡ会長）
十代　昭和六一年度　山下　正幸（　〃　）
十一代　昭和六二年度　鈴木　武道（西小ＰＴＡ会長）
十二代　昭和六三年度　〃（　〃　）
十三代　平成　元年度　松尾　政徳（三小ＰＴＡ会長）

滝川地区ことばを育てる親の会

昭和五十一年四月、言語障害児学級が滝川第三小学校に開設され、同年十一月には幼児ことばの教室が併設された。言語障害児を持つ親たちが互いに励まし協力し合って、子供たちの幸せのために尽力することを目的に結成されたこの会は、事業として、(1)会員相

互の研修、(2)言語治療教育に対する協力と援助、(3)地域の人々への啓蒙運動等を行い、行事として、親子遠足、学習会、全道親の会大会への参加、広報紙の発行など、地味ではあるが堅実な活動を行っている。

歴代会長

三代　長谷　治（昭五四・四～昭五六・三）
四代　河端　忠信（〃五六・四～〃六二・三）
五代　吉田　留美（〃六二・四～現　在）

奨学資金制度

昭和四十六年滝川市奨学金貸付条例が施行されてから、能力がありながら経済的理由により就学困難な学生生徒にとっては、みずからの向学の志を果たせるよりどころとなり、恩恵に浴す度合も年々向上し当初のねらいは十分果たされてきた。しかし経済事情の変化に伴って、貸付の金額は幾度となく改定され、更に対象を高等専門学校生にも適用できるよう平成元年から実施され運営されている。

・奨学貸付金額の変遷

（円）

年度	大学	高専	高校
41	—		1,500
43	4,000		—
45	—		2,000
49	5,000		—
50	7,000		3,000
51	9,000		4,000
56	12,000		5,000
平元	18,000	11,000	7,000

・実績人員

（人）

年度	大学	高専	高校	計
56	24		5	29
57	28		7	35
58	32		8	40
59	32		5	37
60	28		6	34
61	26		10	36
62	34		13	47
63	30		12	42
平元	31	1	12	44

滝川市教育振興会

教職員が一体となって教育振興のために関係する人々の尽力によって実績を積み上げてきた滝川市教育振興会は、小・中学校職員及び市教育委員会職員による義務教育の振興と教職員の研修を深める目的のもと、研修部・行事部の二部門を活動の柱に、活動目標達成のための研究・実践を強力にすすめている。

・事業内容
①部会研修（教科部会、専門部会、特別部会）の充実
②全市研究集会の開催（九月、二月）
③研究依頼校の設置（公開研究会、講演会、小一、中一）
④教育事情視察の実施（道内三名、道外三名）
⑤空知教育研修センター利用奨励と助成
⑥研究集録の発刊

・行事計画
①小学校陸上競技大会
②小学校球技大会（野球、ソフトボール）
③児童生徒作品展示会
④音楽発表会

⑤小学ミニバスケットボール大会
⑥英語コンテスト
・歴代会長
昭五八　本間　鉄男（西小校長）　昭五九　道仏　文夫（開西中校長）
〃六〇　中川　力（東栄小校長）　〃六二　鈴木　健治（　〃　）
〃六一
〃六三　藤根　地久（江部乙小校長）　平　元　山本　幸次（江陵中校長）
平　二　鎌内　三郎（第二小校長）

空知の教育

昭和五十二年の学習指導要領改訂を受けて、昭和五十三年以来、「みんなで創る空知教育」を指標に、教育関係者が相互に理解を深め合い協力し合う体制をつくって、地域、父母の期待に応えるべく取り組んできた。

空知は四季の変化に富む雄大な自然に恵まれ、先人の進取の気性が人々の心の中に培われ、たくましい精神風土を形成してきた。その風土のもつ「厳しさ」や「豊かさ」と、人々の知恵を融和させた営みが空知における生活文化を創造し、誇り高い伝統を生み出してきたところである。

また空知は道央と道北・道東を結ぶ中継点に位置しており、従って道内における経済活動や生活圏域を結ぶ重要路線として高速自動車道の整備が進められ、平成元年秋には滝川・深川間が供用された。また道道夕張芦別線の新設整備が急速に進められている。

小中学校の児童生徒数は、ピーク時の昭和三十五年は約二〇万人だったのに対し、平成元年は約五万人になり、四分の一に激減しており、学校数は四一一対二〇八校と半減している。石炭と稲作を産業基盤として発展してきた空知ではあるが、産業構造の変貌によって閉山、減反による人口減と過疎化現象が核家族化の進行と相まっての児童生徒の減少と考えられる。反面管内各市町村における地域の活性化へのとりくみは顕著なものがあり、企業誘致をはじめ、若者を中心としたイベント開催などによる意識の高揚など様々の努力を続けている。また、高齢化がすすむ中にあって国民食糧の供給を目ざし稲作を主体とした専業農家により味の良い生産性の高い農業を展開しており、地域発展の役割を果たしている。

このように空知管内には様々の問題はあるが、空知の各学校ではそれぞれの地域の変化に即した適切な実践課題を設定しその解明に努力しているところである。空知教育局及び管内市町村教育委員会は昭和五十二年より空知教育の進展を期して具体的な実践課題を、「小中学校教育推進の重点」として示し、学校教育の充実発展のために努力している。

昭和六十二年度　空知管内小中学校教育推進の重点

総括重点

人間性豊かな児童生徒の育成を目指し、創意と活力にみちた学校教育の推進に努める

重点1　地域に根ざした教育活動を進める学校経営を
〃2　基礎的・基本的な内容を身につける各教科の指導を
〃3　道徳性を培い実践化を図る道徳の指導を
〃4　自主的実践的な態度を育てる特別活動の指導を
〃5　心身ともにみずからを鍛える健康・安全指導を
〃6　自己を理解し触れ合いを大切にする生徒指導を

いま再び開拓魂をよみがえらせ、たくましく心豊かな人づくりや香り高い文化を創造することこそ空知教育の課題である。これまでの管内教育における推進の重点や実践の成果と地域社会の実態を踏まえ、空知の地域に根ざした教育を推進すべく、各学校においては研究主題を設定し、全教職員で年次計画に沿いながら実践的研究をすすめ成果をあげている。

生涯教育の推進については、道段階の取り組みがほとんどで、全道的にも管内的にも市町村段階の取り組みは始まったばかりの状況であると言えるが、管内では、滝川市をはじめ、美唄市、沼田町において、「生涯学習推進本部」等を設け、具体的計画の策定や、施策推進を行っている。

最近における学校教育の動向

昭和二十年八月　太平洋戦争終結後、日本の教育は新日本建設に向かって一八〇度の転換をしスタートをきった。昭和二十二年、教育基本法、学校教育法、教育委員会法が制定され、昭和二十四年には、教育公務員特例法が制定施行された。

学校教育法の施行に伴って教育課程の基準として学習指導要領試案が示され、以来、学力の全国水準を確保し、学習者の学習内容の保障と、その向上のため幾度か改訂され今日に至っている。国際的に日本の科学技術の水準が極めて高く評価されるようになった背景には、これらの施策とその時々の事態に対応した適切な教育が全国的に行われてきたことによると云っても過言ではない。

昭和五十二年、激しい社会状況の変遷や学校教育の現況に鑑み、学習指導要領が全面的に改訂され公示された。その主たる内容は、知徳体の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成、教育内容を精選し創造的能力の育成、ゆとりと充実した学校生活の実現、創意工夫を加えた学習指導などであり、各教科の内容に小中高の一貫性を図ることが求められ、小学校は昭和五十五年度から、中学校は昭和五十六年度から完全施行されてきた。

社会情勢の急激な変貌は、生活環境を大きく変え、人々の意識や価値観の多様化を招くとともに、人間性の喪失や連帯感の欠如などの憂慮すべき様相が見えてきた。こうした中で人間尊重の教育により一層つとめ、創意と工夫に満ちた学校教育が望まれ、文部省は臨教審、教課審の答申をうけ、平成元年二月「学習指導要領」案を発表し、同年三月文部省告示として公示した。

今回の改訂学習指導要領の特色は、①心の教育の充実、②基礎基本の重視と個性教育の推進、③自己教育力、自己学習力の育成、④文化と伝統の尊重と国際理解の推進があげられる。

物質的に豊かな時代に生きる現代の子供たちにとって、とかく歪みがちな「心」の問題を重視していることと、生涯学習社会の中における学校教育は、その基礎を培うということで、自己教育力、自己学習力の育成の重要性を示している。自ら学ぶ意欲と主体的に社会の動きに対応できる能力の育成を図り、基礎基本的な内容指導を徹底して、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。特に小学校低学年の社会科と理科を合科し生活科として新しい観点で、生活自立の基礎を養おうとするもので、社会と自分、自然と自分、

自分自身を学習対象とし、体験学習を通して学びとらせるもくろみであり、更にその体験学習において学び得たものを中学年における地域社会の学習にどう連動させ発展させ継続させるか、教育現場としての大きな課題のひとつである。

空知教育研究所（緑町三丁目六―二二）

昭和二十四年に結成された空知教育振興会の諸種の研究及び事業は、空知教育研究所設立へと発展、昭和二十七年四月二十一日、滝川江陵中学校の一室（五坪）を借りて研究調査の事業を開始した。昭和四十三年十月九日、空知教育研修センターが設置されたことを機会に、同センター内に移転し現在に至っている。

当研究所の運営の方針として、現代教育思潮を踏まえ、教育研究の科学化につとめ地域性豊かで現場に即応し、利用されやすい資料作成することから、現場実践を基底にした望ましい教育方法をさぐる方向で常に確かな研究にとり組んできた。しかもその成果は、教育現場に環流され実践的に検証されるばかりでなく、所報「教育空知」は地域父母を含めた思索研究実践の交流という意味深い機能も果しながら、四五三号発行（平成元年八月号現在）にまで至っている。

当研究所は六名の所員が一人一課題を担当し、現場の研究協力委員との密接な連携によって研究調査が進められその成果は「研究紀要」としてまとめ内外に発表してきた。平成元年度において、一三六号に達している。

また、道内外の各教育研究所との共同研究や空知教育研修センターとの連携を図りながら、研修の実践を積み上げているが、平成元年十月には、第四十四回北海道教育研究所連盟研究発表大会を主催し、研究成果の発表とともにその交流をはかり、空知地域の教育研究に大きなはずみを得られるよう準備が進められており、その期待されるところは大きいものがある。

・**「教育空知」購読部数の推移**

年度	六〇	六一	六二	六三	平元
部数	一、七八九	二、〇〇八	一、八三二	一、七六二	一、五九一

・空知教育研究所維持委員会（平成元年度）

顧問

空知支庁長　出葉　良彦
空知教育局長　崎出　等
空知管内町村会長　森　正一
初代会長　神部　俊郎

会長　吉岡　清栄　滝川市長
副会長　田中　直吉　雨竜町長
同　平塚　学　奈井江町議会議長
常任委員　中川　徳男　砂川市長
同　東田　耕一　芦別市長
同　板谷　利雄　長沼町長
同　竹内　正一　南幌町長
同　宮本　光男　秩父別町議会議長
同　羽田　公一　幌加内町教育委員会委員長
同　猫宮　守夫　上砂川町教育委員会委員長
同　袖村　正直　妹背牛町教育委員会教育長
同　本間　茂　滝川市教育委員会教育長
同　余野　善治　南空知ＰＴＡ連合会会長
同　荒田　信夫　月形中学校長

同　谷口　勉　深川中学校長
監　査　吉田　良宗　新十津川町教育委員会委員長
同　酒井　隆　滝川市明苑中学校長
幹　事　岡田　秀夫　滝川市助役
同　渋谷　繁一　空知町村会事務局長

空知教育研究所研究課題（昭和六十年度以降）

昭和六十年度
創造性を高める指導法の研究（二年研究　二年次）
学習意欲を高める指導法の研究（同　右）
学級担任のための理科ハンドブック（一年研究）
性教育に関する研究（二年研究　一年次）
地域の特性を生かした教育活動に関する研究（二年研究一年次）
自己教育力を育てる実践研究（三年研究　一年次）

昭和六十一年度
地域の特性を生かした教育活動に関する研究（二年研究二年次）
性教育に関する研究（二年研究　二年次）
自己教育力を育てる実践研究（三年研究　二年次）
管内小中学校における校則の調査研究（一年研究）
一人一人の児童生徒が意欲的に取り組む体力づくりの研究（二年研究　一年次）
児童生徒の健全育成を図る指導に関する研究（二年研究　一年次）

昭和六十二年度
自己教育力を育てる実践研究
一人一人の児童生徒が意欲的に取り組む体力づくりの研究（二年研究　二年次）
児童生徒の健全育成を図る指導に関する研究（二年研究　二年次）
家庭における性教育の手引き（一年研究）
算数数学科における問題解決学習に関する研究（一年研究）
自己評価に関する研究（二年研究　一年次）

昭和六十三年度
自己評価に関する研究（二年研究　二年次）
学校における音楽活動に関する調査研究（一年研究）
欠席しがちな児童生徒の指導に関する研究（一年研究）
教育環境の実態についての調査研究（一年研究）
家庭の教育力の回復に関する研究（二年研究　一年次）
子どもの発表力を高めるための研究（同　右）
学習指導の改善（三年研究　一年次）

平成元年度
家庭の教育力の回復に関する研究（二年研究　二年次）
子どもの発表力を高めるための研究（同　右）
学習指導の改善（三年研究　二年次）
集会活動に関する研究（一年研究）
一人一人の子どもの特性を生かした学級経営に関する研究（二年研究　一年次）
触れ合いを大切にする生徒指導の研究（二年研究　一年次）

歴代所長
一一代　森谷　英夫　五三・四～五五・三
一二代　本間　茂　五五・四～五九・三
一三代　八木沢　馨　五九・四～六二・三
一四代　山本　幸次　六二・四～平元・三
一五代　佐々木信尊　平元・四～現在

現代っ子の特徴

日本経済の高度成長によって庶民のくらしも物質的に豊かになった。しつけの面で個を尊重し重視するあまり節度を失い、いわゆる無気力、無感動、無関心、無責任、無作法の五無主義の現代っ子ということばが生まれ、平成になってもその傾向は強まるばかりで、個性化を強調しながら個を生かせず埋没している有様である。

身体的な成長はめざましく、昭和五十四年における中学三年生男

子の身長と昭和六十三年のそれと比較してみると約二センチメートルの差があり、女子においても同様である。これは体位面では成長著しいものがあり早熟である。

明かるく素直でのびのびしているが、創意工夫やねばり強さ、根気が十分でなく、また自ら解決していこうとする意欲に乏しい。というのが現代っ子に対する一般的な見方である。しかし問題傾向から次のような点が指摘される。

基本的な生活習慣が身についていなくルーズであること。集中力が不足しているところから落ちつきに欠けること。難しいことは避けすぐあきらめるという耐性の不十分さがあること。規範意識が乏しく、正しく判断し正しく行動することができないこと等があげられる。これらの問題傾向が日常生活における具体的な行動として習慣化することのないよう、自らを省み、行動を自覚して照応できるものを見つけ出させる必要がある。

現代社会の急激な変化のスピードについていけない一般社会の風潮の中での成長として当然の問題傾向なのかも知れないが、今こそ親として、教師として、社会として、何をなすべきか、それぞれの在り方や手法について正しく見直し、ねばり強く創意工夫しながらとり組まなければならない責務がある。

滝川の児童生徒の体位

滝川市教育委員会は学校における保健管理及び安全管理に関し必要な事項を定め、児童生徒の健康保持増進をはかり、それによって学校教育の円滑な実施と、その成果の確保を目指して推進している。

滝川市の小中学生の体位（身長・体重・胸囲・座高）の特色ある傾向は、男子の場合は、身長・体重について小学校三年生を除いて胸囲はすべての学年において全国平均を上回っている。女子の場合は、平均的に下回っている傾向だが、胸囲については中学一、二年生を除いて上回っている。

このことから男子は背が高くがっちり、女子は背は少し低いががっちりした体格の子どもたちが多いと言える。

・児童生徒の平均体位の比較（六三年度調査による）

区分			身長(cm)		体重(kg)		胸囲(cm)		座高(cm)	
			滝川市	全国	滝川市	全国	滝川市	全国	滝川市	全国
男	小学校	1	116.7	116.6	21.5	21.3	58.4	57.9	66.4	65.3
		2	123.0	122.3	24.2	23.9	60.3	60.1	67.5	67.8
		3	127.3	127.8	26.7	26.8	64.1	62.5	69.6	70.3
		4	133.4	133.0	30.4	29.9	65.4	64.9	72.2	72.5
		5	138.7	138.2	35.0	33.4	68.9	67.5	74.4	74.7
		6	144.1	143.8	38.2	37.2	71.0	70.1	76.8	77.0
	中学校	1	151.3	150.7	43.6	42.6	74.4	73.2	80.5	80.3
		2	161.7	158.1	49.3	48.0	77.6	76.6	84.3	84.0
		3	164.7	164.0	54.3	53.4	80.5	80.2	87.1	87.1
女	小学校	1	115.9	115.8	21.0	20.9	56.9	56.5	64.5	64.8
		2	122.0	121.4	23.6	23.3	58.9	58.6	67.1	67.4
		3	126.7	127.1	26.1	26.3	61.3	61.1	69.2	69.9
		4	132.8	132.7	29.6	29.5	64.1	63.7	71.2	72.4
		5	139.2	139.2	33.3	33.6	67.2	67.0	74.7	75.4
		6	145.6	145.8	38.8	38.3	71.2	70.8	77.9	78.6
	中学校	1	150.9	151.2	43.0	43.5	74.7	75.1	80.8	81.8
		2	154.3	154.6	46.6	47.1	77.2	77.6	82.7	83.5
		3	156.3	156.3	50.5	49.8	80.3	79.6	83.7	84.5

（全国平均は62年度分）

・体位の推移

区分		小学校6年 身長(cm)	体重(kg)	胸囲(cm)	座高(cm)	中学校3年 身長(cm)	体重(kg)	胸囲(cm)	座高(cm)
男	50年度	141.6	35.1	66.7	75.8	162.2	51.5	79.8	86.3
	55 〃	143.7	37.7	71.9	77.0	164.1	53.4	80.5	87.0
	60 〃	144.1	38.4	71.0	77.1	164.3	54.2	81.0	87.3
	61 〃	143.5	38.2	71.1	76.6	165.0	54.4	81.9	87.5
	62 〃	144.2	38.5	71.8	77.1	164.5	54.9	81.9	87.4
	63 〃	144.1	38.2	71.0	76.8	164.7	54.3	80.5	87.1
女	50 〃	144.2	36.8	69.8	77.4	154.5	49.9	79.5	83.8
	55 〃	145.7	38.5	70.8	78.4	156.0	49.7	80.9	84.3
	60 〃	145.8	38.7	71.6	78.3	156.2	49.5	79.1	84.6
	61 〃	145.3	38.1	70.5	77.9	156.6	49.6	79.6	84.5
	62 〃	145.8	38.6	71.6	78.2	156.6	50.0	80.4	84.5
	63 〃	145.6	38.8	71.2	77.9	156.3	50.5	80.3	83.7

・視力の状況

区分＼年		56	57	58	59	60	61	62	63
小学校	男	26.8	24.0	24.1	27.1	25.8	26.8	26.3	28.6
	女	34.4	31.1	30.7	29.8	27.5	30.3	31.8	42.9
中学校	男	40.0	35.6	36.1	36.4	37.2	41.1	43.6	34.4
	女	49.5	49.8	45.5	45.5	46.2	49.3	49.2	48.9

※裸眼視力 1.0未満の占める率の年次推移。
※小・中学校ともに女子の方が高率となっている。

第六節　学校給食・学校林

滝川市の学校給食

滝川市の学校給食は昭和二十九年六月に、第一小学校・第三小学校が週五回の完全給食を実施したことが実質的なスタートと言えよう。翌三十年、完全給食の一層の推進を図るため各小中学校PTAの理解と協力を得て、滝川市学校給食連合会を結成、この連合会は製パン工場の管理運営、物資の一括共同購入、給食委員会設置による連絡調整、学校給食の内容充実に関する意見集約等に努力、昭和三十二年から、第二小学校、西小学校、江陵中学校、明苑中学校が完全給食実施の足並みを揃えることができた。

しかし不十分な各校の施設の中で単独校方式による給食継続について危惧する向きもあり、将来を展望し学校給食のもつ意義を検討する中で広く意見を徴し、現在の滝川方式とも云える全国的にも極めて珍しい地域あげての単独校方式が吉岡市長の裁断により決定した。時あたかも市内小中学校は、新設・統合・改築を含めて、全校舎の不燃化が昭和五十六年で完成することから、この最終年度において江部乙給食センターを廃止し、江部乙小・中二校を含む一一校全部の単独校方式実施のための施設と機器導入を含めて一切が完了した。また、米飯の週三回導入、滝川市学校給食製パン工場への助成、調理手の市正規職員としての身分保障、献立の共通化と調理技術の研修向上、事務の集約と学校における事務量の軽減等、行政機関・父母・教師・子ども・PTA・調理担当者・栄養士が一体となってそれぞれの責任分担を明確に果たし、互いの業務を理解協調し、調理したばかりの温かい給食が子供たちに届けられるとともに、それらを調理してくれる調理手さんの尊い姿を見ることによって心のこもったおふくろの味を味わい感謝しながら食生活のあり方を考えさせる教育の本質に迫るものとなっている。

この滝川市の学校給食の実践は、全国学校給食研究大会においても注目され多くの賛辞をおくられたが、日本学校健康会から「学校

給食における学校・家庭・地域の連携推進事業」の目的にかなうものとして選ばれ、全国一七地域のひとつとしての指定を受け、昭和六十年、六十一年の二ヵ年間にわたり、学校・家庭をとりまく地域社会の問題として児童生徒の食生活をとらえ、学校給食を通して家庭・地域の食生活の改善に資するべく、従来のものを更に密度の濃い内容として、①父母の参加する学校給食（試食会・親子給食会および父母懇談会等の機会を通して給食の理解を高め反映を図る）、②地域性を生かした学校給食（地場産物を取り入れ献立に工夫するとともに郷土食の発掘につとめる）の研究活動を実践し、その成果は全国的にも高く評価されているところである。

滝川市の学校給食が完全給食の歩みをはじめて三十有余年にわたる経過は、センター方式か、単独校方式かの選択の岐路があったものの、組織や運営・衛生管理・事務管理等が確立され、その実践は地味ながらいささかの事故もなく、堅実な歩みを続けてきたのは、これらを遂行してきた関係者の筆舌につくし難い大きな力があったことは当然である。

・学校給食の現況（平成元年度）

①形　態　単独校方式　完全給食　年一八五回・週五回

②給食数　小学校　七校　三、八八九名
　　中学校　四校　二、三三三名　計六、二二二名

③給食費（一食当り）　小学校　二〇三円
　　中学校　二四六円

④給食内容
　パン　小学校（水・金曜日）　中学校（火・木曜日）
　　種類　角食・コッペ・レーズン・ココア・人参・クリーム・ジャムパン等
　米飯　小学校（月・火・木曜日）　中学校（月・水・金曜日）
　　種類　白飯・赤飯・五目ごはん・カレーライス・ちらし寿し等
　めん類　小学校（水曜日）　中学校（火曜日）
　　種類　うどん・そば・ラーメン・スパゲッティ等
　牛乳　原則として毎日（週五回）
　おかず
　　原則として毎日（週五回）
　　種類　煮物・揚げ物・蒸し物・汁物・炒め物・あえ物・フルーツ等

学校給食連合会

学校給食連絡協議会が発展的解消し滝川市学校給食連合会として発足したのは昭和三十年八月十三日であった。この会は市内の学校給食実施校の代表と実施校ＰＴＡの代表をもって組織し市内の学校給食実施について連絡調整及び充実振興を図り製パン工場の管理運営にあたることを目的とし、具体的には、各学校給食用物資の選定と一括共同購入、共同献立への協力、各方面への要請陳情、工場の円滑な運営と衛生管理、パンの品質向上の調査研究、施設設備の整備・充実等、市教育委員会の指導と支援をうけながら確かな歩みを続け学校給食の単独校方式の短所を側面的にカバーする一貫した努力を積み上げ今日に至っている。これはこの会の運営にかかった関係者の尽力のたまものであり、滝川方式とまで評価された滝川市学校給食が官民一体となって実施されてきた成果である。このことによって市民の学校給食に寄せる関心は益々高くなり今後の発展が期待される。

・歴代会長

一四代　中川日出吉（昭五四年度〜五五〜）　一五代　石黒　直（昭五六年度〜五七〜）
一六代　少覺三千宏（〜五八〜）　一七代　清水　但男（〜五九〜六〇〜）
一八代　宇山　昌宏（〜六一〜）　一九代　柳　承治（〜六二〜）
二〇代　坂田　秀昭（〜六三〜平元〜）　二一代　川口　義弘（平二〜現在）

学校給食製パン工場

業者委託によるパンの供給をうけて学校給食を続けてきたが、製パン業者からの辞退の申し出などがあり、給食連合会は市理事者に学校給食継続について要請、各学校及びPTAの協議によって共同製パン工場設置が最も得策との結論に達し、昭和三十年市理事者の理解と努力によって泉町三三五番地に市費により建設された。

昭和四十二年、パン供給量が予想をはるかに上廻り、一日一万食近くに達しパン工場の能力不足を来たしたこと、工場の施設の老朽化が激しくなったこととともに増築等により効率の悪さ等が大きくなった。そこでパン工場の拡張新築のため、建築費外九一四万円余（市費七一一万円、給食連合会二〇三万円）を投じ、八八・二五坪木造平家一部二階の工場と新設窯その他設備を導入し整備を完了した。

以来製パン工場では品質向上のために研究と製パン技術の練磨、施設設備の衛生的な管理運営に努力したことから、北海道学校給食会の学校給食パン品質審査会において昭和三十年以来優秀賞を得ていたが、昭和四十七年には、焼き上がり、形、光沢、安く製造されしかもおいしいという折り紙がつき、北海道第一位に選ばれるほどになった。

米飯の導入が増したことから、パンの供給量が減少し工場の運営も難しくなってきたが、連合会において調整し、小・中学校のパン給食実施日をズラし、週四回の工場稼動が確保され、一層の質的向上に努力している毎日である。

・現在の状況

敷地面積　九四四・九五平方メートル
建物延面積　二九一、三七九平方メートル
構造　木造モルタル平家一部二階　長尺カラートタン
設備（主な備品）
ミキサー　一　分割丸目機　一　整形機　一
パン焙焼機　一　スライサー　一　自動包あん機　一
パンチマシン　一　包装機　一　給湯器　一
むし機　一　自動車　一
製造計画（平成元年度パンの種類と予定回数）
普通パン（角食　四、コッペ　一二）
混入パン（人参　一二、レーズン　一四、ココア　一四、豆　六、ゴマ　一二、カボチャ　一〇）
内包パン（小倉あん　二、クリーム　二、チョコクリーム　二）
小型パン（丸　二六、変り型　二二、細長　三四）
年間予定回数　一六四回（週四回）
職員　事務長　一、事務員　二、工員　四　計七名

学校林

自然に親しみ自然をいつくしむ心を育て、樹木を撫育することによって勤労の尊さを学ぶ学習の場として各学校では、学校林の育成にかねてから尽力してきた。年月を重ねることによって極めて順調に生育しているが、自然環境や立地条件の悪さ、不測の事態等によ

用途	設置時期	所在地	面積 ㎡	植林状況（本）	育成・管理状況	備考
第一・第三小学校学校林	昭8年5月	砂川市空知太 507 508 509 — 1	115 13,328 129,355 計 142,798	昭 8～10 トドマツ 4,070 オニクルミ 900 昭21 カラマツ 2,000 昭25～28 トドマツ 55,000	・順調に成育 ・両校ＰＴＡ学校林維持委員会が所管（委員長第三小ＰＴＡ） ・管理人 中村広吉	・児童の自然学習の場として利用し効果をあげている ・一部（427㎡）を高速道用地として売却（昭62年12月）
第二小学校学校林	昭27年	南滝の川 431 489 — 1 490 — 2 495 496 — 1 497 — 3	579 18,522 9,964 1,391 1,642 85 計 32,183	昭28～30（3年計画） カラマツ 14,100 やちだも 900 昭54 カラマツ 2,500	・順調に成育 ・管理人 石川 瀞	・昭52年滝川市斎苑用地として一部(9,964㎡）を交換、斎苑提供地のカラマツ 927本を売却（381,080円） ・苗木を購入 残36万円を基金に繰入れ
西小学校学校林	昭31年7月	砂川市富平 587 588	48,436 4,819 計 53,255	昭33 カラマツ 1,800 昭34～37（4年計画） トドマツ 15,000	・昭和31年の苗木、活着悪く野ねずみ、野兎の害により大部分枯死 ・昭和33年以降補植 ・ＰＴＡが所管 ・管理人 後藤友孝	・撫育につとめるも立地条件悪く前途多難
東栄小学校学校林	昭27年9月	赤平市共和 590	46,786	トドマツ 2,500 やちだも 500 カラマツ 250	・野ねずみ、野兎に悩ませられながらも撫育に努力中 ・管理人 内野博行	
西高等学校学校林	昭41年11月	雨竜町字オシラリカ 190 — 1	283,876	トドマツ、カラマツ 23.08ha	・平成元年度において除間伐 ・管理人 金山靖治	

って経営の難しさの出ている学校林もある。江部乙小・中学校学校林は飛火による類焼の事態となり残存樹林が極めて少なくなったことから昭和五十四年度をもって廃止した。

その他の学校林の概況は前頁の表のとおりである。

第七節　その他の学校

滝川市立おおぞら幼稚園（泉町二丁目二―二四）

昭和五十二年四月七日、滝川市最初の公立幼稚園として発足した。昭和五十六年九月、課外保育実施に伴いプレイルーム他を増築、昭和六十二年十月創立十周年記念事業として遊具肋木などを設置し、施設設備の充実がはかられた。

・卒園児数　九一七名

・園児数の推移（定員一二〇名、三クラス編成）

年度	数
55	119
56	114
57	116
58	117
59	112
60	111
61	120
62	117
63	117
平 1	120

・歴代園長　三代　粟井　稔（昭和五六・四・一～五七・三・三一）

四代　本間　鉄男（〃五七・四・一～五八・三・三一）

五代　三浦　淳志（〃五八・四・一～六二・三・三一）

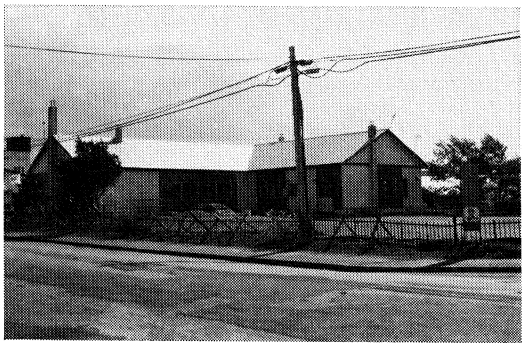
六代　棚井　保（〃六二・四・一～現在）

滝川市立みずほ幼稚園（滝の川町西七丁目九二七―一九）

昭和二十八年五月、滝川町婦人会滝の川支部によって開設された「みずほ保育園」は、農業従事と家事に繁忙を極めていた地域婦人に大きな期待と希望をもたせた。以来、園舎の建設、移転、通年保育への移行など幾多の変遷を辿りながら、地域幼児保育の向上に努力が続けられてきた。しかし、地域事情が団地造成、住民の増加等の変化と、社会的要請に即応し、昭和五十七年三月三十一日をもって「みずほ保育園」を閉じ、市に移管をし学校教育法に則り小学校入学前幼児の心身の発育を助長することを目的とし、同年四月一日「滝川市立みずほ幼稚園」として新発足した。

園舎は保育園舎をそのまま継承し、定員一二〇名、三クラス編成である。毎週土曜日を除き課外保育として定員四〇名の希望児保育を実施している。

平成元年十一月にはトイレの水洗化が完了、快適な保育活動が期待されている。



市立みずほ幼稚園

・園地面積　二、七八四平方メートル

・園舎面積　五二三・一三平方メートル

・構　造　木造平家建

・工　事　費　二、六七五万六千円

・主な施設　保育室4　遊戯室1　保健室1　器具室1　職員室会議室他

・卒園児数　四九五名

・園児数の推移（定員一二〇名、三クラス）

・教職員数　六名

年度	数
55	／
56	／
57	120
58	119
59	117
60	118
61	109
62	103
63	97
平 1	92

・歴代園長　初代　粟井　稔（昭和五七・四・一〜六〇・三・三一）
二代　仲西　正（〃　六〇・四・一〜六三・三・三一）
三代　伊藤　澄夫（〃　六三・四・一〜平成二・三・三一）
四代　細田　長知（平成二・四・一〜現在）

学校法人滝川学園滝川幼稚園（栄町二丁目七―二三）

昭和二十八年五月十六日開園した当園は、昭和五十六年十月木造遊戯室を鉄筋造に改築、園舎の不燃化完了。昭和五十七年五月二十二日、園舎完成を記念事業として創立三十周年式典を盛大に行った。更に、同年十一月、永年にわたって幼児教育の充実に努め、地域の私学振興に尽した功績が認められ、北海道知事より北海道社会貢献賞表彰の栄誉を受けたことは特筆される。

・卒園児数　六、九五七名
・園児数の推移
・教職員数　一四名

年度	数
55	293
56	260
57	241
58	235
59	215
60	242
61	227
62	210
63	207
平 1	221

・歴代園長　初代　泉　完（昭和二八・五・一〜六一・一・二八）
二代　泉　敬止（〃　六一・四・八〜現在）

滝川白樺幼稚園（一の坂町西一丁目一―五）

昭和四十四年三月六日開園した当幼稚園は、昭和五十四年九月、創立十周年の記念式典を挙行、鼓笛などの音体教育をとり入れ、特色ある保育活動を行ってきているが、昨今の社会事象を反映して園児の減少が目立ち、昭和六十一年四月から一クラス減の五クラス編成で運営している。

・卒園児数　二、九〇五名
・園児数の推移（六〇年まで六クラス、六一年以降五クラス）
・教職員数　一一名

年度	数
55	338
56	232
57	216
58	240
59	235
60	208
61	189
62	151
63	157
平 1	183

・歴代園長　初代　芳村　良範（昭和四四・四〜〃　五六・三）
二代　芳村　和夫（昭和五六・四〜現在）

えべおつ幼稚園（江部乙町東一二丁目五―一八）

昭和三十八年九月、円覚寺境内に「えべおつ幼児園」として住職本川之朗が開設、翌三十九年二月宗教法人の「えべおつ幼稚園」として道知事の認可を受けた。宗教情操を育くみ、温かい情操の豊かに思いやりの深い人として生長されることを念願し家族が一体となって一生心に残る思い出となるよう幼児教育の基本とし、熱心な指導を続けている。

・卒園児童数　一、四九〇名
・最近の園児数の推移

年度	園児数
55	58
56	57
57	58
58	48
59	36
60	31
61	35
62	26
63	26
平元	25

・歴代役員

理事長　初代　本川　之朗（昭三八・一〇・一～現　在）

園　長　三代　本川　之朗（昭四三・　四・一～現　在）

後援会長　初代　進藤　正雄（昭三八・一〇・一～昭四八・三・三一）

二代　高橋末治郎（昭四八・　四・一～現　在）

空知自動車学校（新町四丁目七―三〇）

開校以来、堅実な経営と優秀な指導陣、整った施設設備が相まって毎年数多くのドライバーを養成してきた。近年の社会経済の進展は自動車の保有台数の急増となり、懸念された事故も一向に減らない状況は変らず、高速道路の整備が進むとともに女性ドライバーの増加等から、教習内容や経営にも新しい感覚や方途が要請されてきた。本校はそれらの課題に積極的に対応しながら日常教習内容を豊かに、指導が徹底できるよう努力している。

昭五七	託児室の設置	幼児連れの主婦の教習生のために。
昭五八	模擬運転装置の導入	実車教習に入る前に、基本操作等を教習するシュミレーター装置を導入し教習の効率化をはかっている。
昭六二	ＡＴ車の教習開始（五台）	近年ＡＴ車の需要が広まり、正しい取扱いと操作が望まれることから規定教習内容に組み入れ教習を開始した。
平成元	高速技能教習の開始	高速自動車道が延伸されるのに伴い、これに対応して、教習生に高速道路運転技能の体験教習を開始した。

・歴代役員

(1)空知自動車学園会長　初代　田中君太郎（昭六二・五・一六～現　在）

同　理事長　二代　田中君太郎（〃四七・四・一八～六二・五・一五）

同　同　三代　土屋　清治（〃六二・五・一六～現　在）

(2)空知自動車学校校長　二代　田中君太郎（昭二九・一二・三〇～昭五七・六・三〇）

三代　土屋　清治（〃五七・七・一～現　在）

・保有車両

大型車　一、　普通車　二九、　大型特殊　一、　二輪　五

・最近の卒業生数

年度＼科別	普通科	大型科	大特科	二輪科	計
昭六二年度	九八八	七八	八四	一二三	一、二七三
昭六三年度	九八六	八六	六九	七三	一、二一四

・開校以来の卒業者数（平成元年六月末現在）

六六、八一七名

江部乙ドレスメーカー学院（江部乙町東十二丁目三―六〇）

昭和三十年十一月一日開校した本学院は、ゆとりと豊かな人間形成を目指し、洋裁に関する専門的技術・技能の教授と、一般教養の向上など多岐にわたる教育内容をもって教育効果をあげ、生徒も他地区からの通学者もあり、有能な技能人を育ててきた。しかし、消

費経済が多様化し発達する中で生徒数も漸次減少し、他の各種学校の休校廃校も続出して情勢はきびしくなりつつあった。本学院は、昭和五十六年、校舎内部の改造、整備を行い教育内容の一層の充実をはかり経営努力を続けてきたが、社会的な流れに抗し難く、昭和五十九年より休校とし、各種学校連合会の北空知支部と南空知支部との合併を機会に、昭和六十一年十一月八日をもって閉校の止むなきに至った。本学院の本科・師範科において学ばれ卒業された人々は社会のそれぞれの立場で活躍されている。

学院長　内山　愛子（昭和三一・一～昭和六一・一・一八）
理事長　内山　鴻一（同　　右）

滝川中央技芸学校（本町五丁目四―三一）

昭和四十三年、旧空知高等技芸学校の経営を引き継ぎ、洋裁科を新設し、従来の編物科、和裁科との三科体制とした。昭和五十五年校名を滝川中央技芸学校と改称、現在に至る。開校以来、一、三〇〇名余の卒業生を送り出している。

・最近の卒業生数

科＼年度	62	63	計
洋裁	6	4	10
和裁	10	8	18
編物	6	2	8

・歴代校長

藤井愉美子　昭和四三・四・一～現在

滝川家政学院（本町二丁目四―三〇）

昭和三十四年、各種学校法に基づいて道知事の認可を得て本校は開校した。以来、編物・洋裁の二科を設置して技能者の教育にあたり各種の資格検定も行うなど幅広い学院経営を行ってきた。近年社会経済の急速な進展は消費構造の変革をともない、学院生として技能を身につけようとする風潮も衰え入学者も近年減少しつつある。しかし半面において個別にしかも行き届いた指導ができることから、よい技能を修得し自立したいという人々もおり、新たな決意と情熱をもって教育指導につとめている。

・卒業生数　一、四五三名
・在院生（平成元年度）
洋裁科　一〇名　編物科　七名　計一七名
・歴代理事長　初代　中森　重雄（昭三四・三・二四～〃五一・九・三〇）
二代　西原　兵司（現〃五一・一〇・一～在）
・歴代学院長　初代　松田新之助（昭三四・三・二四～〃五一・九・三〇）
二代　西原美咲枝（現〃五一・一〇・一～在）

滝川ドレスメーカー専門学校（栄町一丁目七―一四）

専門的な洋裁教育を施す目的をもって終戦直後に幾多の困難をしのぎながら開校し、以来数多くのすぐれた卒業生を世に送り出してきた本校は、施設設備の充実とともに教育内容の豊かさから生徒は増加の一途をたどり、開校三十周年の記念式典を昭和五十二年八月盛大に挙行した。しかし経済情勢の流れは消費型傾向が強まり、生徒数は近年とみに減少しつつある。現在は専門課程師範科の一科を

もって教授にあたっている。

・卒業生数　六、七〇〇名

・歴代理事長　初代　今野　正義（昭二一・一二・一　現在）

・歴代校長　初代　池田　満子（昭二四・一〇・一　〃六二・三・二五）

二代　奈良美智子（昭六二・四・一　現在）

空知医師会立准看護学校（大町三丁目四―二四）

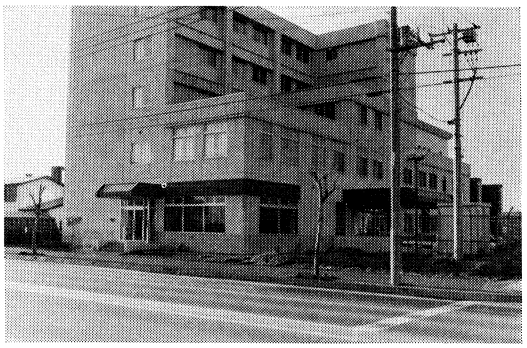
昭和四十四年四月、社団法人空知医師会が創設し開校した本校は、関係者の努力によって数多くの准看護婦、准看護士を北空知・中空知の医療界に送り出してきた。しかし、昭和五十七年四月、滝川市医師会が空知医師会から分離独立し、新町に滝川市医師会館を建設、更に同会館を校舎とする新しい准看護学院を開校することになったことから、その役割を新設の准看護学院にバトンタッチすることとし、昭和五十九年三月十日、第十四期卒業式に引き続き、同じ日に閉校式を行い、一五年にわたる校歴に終止符をうった。

・卒業生総数　四五七名

滝川市医師会立准看護学院（新町二丁目八―一〇）

滝川市医師会は、昭和五十七年四月一日、空知医師会（滝川市、砂川市・歌志内市・奈井江町・浦臼町・新十津川町・上砂川町の各医師にて構成）から分離独立し、新十津川町とともに独自に会の運営をすすめることになった。それに伴って滝川市医師会において医師会館を建設しその中に准看護学院を併置設立をすべく具体的準備作業に入った。

昭和五十八年十二月十三日付で准看護婦養成所の道知事の指定を受けるに及んで、昭和五十九年三月三十一日をもって空知医師会立准看護学校は閉校し、当学院は同年四月一日開校した。四月十四日、旧准看護学校在学中の一年生（三一名）は新二年生として受け入れ、きびしい難関を突破して合格した新一年生ともども入学・編入学式を行い新しいスタートを切ったわけである。以来、昼間は医療機関に勤務し、夜間通学をして看護婦（士）として崇高な道を求める有為な人々に、すぐれた指導者と整った施設設備を配し、精選された教育内容をもって養成活動を続けているところである。



滝川市医師会立准看護学院・学生会館

・経営の母体　社団法人　滝川市医師会

・教授内容　学科　准看護婦科

定員　四〇名

修業年限　二年

・教授組織　専任教官（常勤）　二名

教養科目担当講師　七名

専門科目担当講師　四九名

事務職員　二名

・入学及び卒業状況

年	入学	卒業
59	40	／
60	42	31
61	42	36
62	43	41
63	44	40
平元	43	36
計	254	184

（各年の三月）

・歴代役員
理事長　初代　神部　弘二（昭五七・四～昭六一・五）
　　二代　坪谷　六郎（〃六一・五～現　在）
学院長　初代　神部　弘二（昭五九・四～昭五九・五）
　　二代　吉田　英治（〃五九・五～〃六一・五）
　　三代　男沢　義久（〃六一・五～　六三・六）
　　四代　田畑　時雄（〃六三・六～現　在）

・校章と由来（昭和五十九年四月一日制定）
円形は「和」を意味し、三本の円は空知川を表わしています。
中心のＴＭＡは　Ｔ　タキカワ（滝川）
　　Ｍ　メデカル（医療）
　　Ａ　アソシエーション（団体）
白のＮは、ナース（看護婦）を表現しています。

滝川市立高等看護学院（大町三丁目三―二）

看護婦としての知識及び技術を習得させるとともに豊かな人間性を育て、保健医療チームの一員として、医療及び公衆衛生の普及向上に貢献する者を教育することを目的として昭和四十四年開設された。定員七五名（看護科二五名、修業年限三か年）の承認を昭和四十六年に得、爾来優秀な看護婦を医療第一線に送り出してきた。卒業生の多くは滝川市立病院（例年約八〇％前後）に勤務し、旭川医科大学付属病院、札幌市立病院、札幌厚生病院、道立小児総合保健センター等、道内外の公私立病院で活躍している。

・卒業生数　四〇〇名
・歴代学院長
　初代　小菅　高之　昭和四四・四・一～昭和五五・一二・二五
　二代　徳中　弘之　昭和五五・一二・二七～現　在

第八節　大　学

國學院女子短期大学（文京町三丁目一―一）

中空知に大学を、滝川に大学を、という長年にわたって願い続けてきた市民の夢を現実のものとできたのは、昭和五十七年四月の開学式であり、そこに至るまでの幾多の困難を克服した関係者の労苦は並たいていのものではなかった。しかし開拓者精神をうけ継ぐ滝川市民のたゆみない努力は、滝川市が産業、経済、文化の整備を強力にすすめ、中空知地域の中核都市としての役割をになう以上、次代に生きる青少年の育成に向けての使命は避けて通れない宿命であった。幸い國學院大學理事者高宮学園理事長、道及び文部省の関係、加えて市民各層の力強い支援と指導の賜があって、今回の女子短期大学設立の慶びを得たものといえる。

國學院女子短期大学

昭和五十五年一月、学校法人國學院大學理事会は、それまでの実地踏査を含む諸条件を詳細に検討した結果、滝川市に

女子短期大学を設立し、学科は国文科、英語科、幼児教育科の三科を設けることとした。設置準備委員会は更に具体的条件を立案するための小委員会（六名構成）を組織し作業に入ることを決定した。

昭和五十六年三月、設立する大学の校名を「國學院女子短期大学」と正式に決め、昭和五十六年二月、校舎建築の起工式を積雪の中で厳粛にとり行い、同年十一月落成式を挙行、市民の夢が形となってその美しい姿を南滝の川の広野に現わしたのである。

昭和五十七年四月十五日の開学式に続き、翌十六日、第一回の入学式を行って大学としての教学機能が発足した。恵まれた環境、整った施設設備、すぐれた教授陣と意欲に溢れた学生の真摯な学習活動により、日本固有のすぐれた文化・国民性の探究と認識、更にそれを生活にとり入れ磨いた日本人としての情操を養い、祖国の繁栄と世界文化へ寄与できる人材の育成という國學院の教学精神に基く学問研究と豊かな教養知性の確保につとめている。

なお、國學院大學は平成三年度から國學院女子短期大学の校名を「國學院短期大学」と改称し、男子学生も受け入れる方向で大学就学者に門戸を広げ学生の進路の多様化を図り、本大学の北海道の拠点として充実した大学教育を推進しようと努力中である。

●滝川市は同大学の意欲的な構想に即応し、平成二年七月「國學院短期大学推進室」を市役所内に設置し、大学協力会と連携しながら側面からの支援を進めているところであるが、その方向づけとしては、新しい魅力ある学科の新設を働きかけ、名実ともに男女共学の短大としての自立を願い、将来展望として四年制大学への移行という滝川市民の期待に応えられるよう努力の積み重ねを期しているところである。

そのため大学施設の拡充をはかることとし増築工事に着手した。その主なものは

○現校舎北側敷地内に新たに校舎を建築し二階廊下をもって現校舎と結ぼうとするもので
・鉄筋コンクリート造り　二階建
・延床面積　一、一六三・五平方メートル
・九教室分（秘書実務実習室、情報処理室、演習室㈡、小児栄養実習室等を含む）

○屋外運動施設の整備に力点をおき
・全天候型テニスコート　二面増設（計四面）
・軟式野球用移動バックネット　二面新設
・運動場整備と併せ体育館そばに男子用シャワー室新設

総工費三億六、〇〇〇万円をかけ、平成三年三月に完成させ、新年度から学生たちが利用できるよう精力的に工事を進めている。

・大学の概要
(1)設置者　学校法人國學院大學（理事長　佐々木周二）
(2)校地校舎等
校地面積　一〇三、四六六・〇六平方メートル
校舎延面積　六、一三九・八六平方メートル
（構造　鉄筋コンクリート造四階、塔屋一階建）
体育館延面積　一、二二九・七九平方メートル
（構造　鉄骨造一部二階建）
開学記念館　一、八〇五・四三平方メートル
（構造　鉄筋コンクリート造三階建）
(3)歴代理事長
三代　松尾　三郎（昭四五・四～昭五八・三）

四代　小林　武治（昭五八・四～昭六二・四・一二）
五代　佐々木周二（〃六二・四～現在）

(4)学長・科長

学　長　西岡　弘　文学博士
国文科長　西岡　弘教授
英語科長代行　金山　勝也教授
幼児教育科長　菅原　馬吉教授

(5)歴代学長

初代　田邊　正男（昭五七・四・一～昭六一・五・三一）
二代　西岡　弘（〃六一・六・一～現在）

(6)設置学科及び定員（修業年限二年）

国　文　科　一〇〇名
英　語　科　一〇〇名
幼児教育科　一〇〇名

(7)入学・卒業状況（平成元年四月現在）

学科＼年度	国文科 入学	国文科 卒業	英語科 入学	英語科 卒業	幼児教育科 入学	幼児教育科 卒業	計 入学	計 卒業
57	114		113		138		365	
58	90	109	58	109	127	134	275	352
59	84	79	57	54	128	124	269	257
60	78	77	49	52	106	121	233	250
61	88	73	34	43	100	104	222	220
62	89	81	62	32	79	95	230	208
63	132	81	73	58	94	78	299	217
平元	133		72		77		282	
計	808	500	518	348	849	656	2,175	1,504

(8)資格取得状況

中学校教諭（二級）　国語　一五一名
（〃）　英語　一四九名
幼稚園教諭（〃）　六四二名
保母資格　六一七名

(9)大学の特色及び教育・学生活動

國學院大學は明治二十三年、皇典講究所を母体として、国史・国文・国法を攷究する教育機関「國學院」として誕生し、明治三十九年「私立國學院大學」と改称した。

國學院大學の特色は、優れた先学の文献学、民俗学の学統を受け継ぐもので、とりわけ万葉学の武田祐吉、民俗学の折口信夫、アイヌ文学の金田一京助の三博士は本学が学界に誇る至宝ともいえる。

國學院女子短期大学はこの学を継承し、更に北海道の地域の歴史・文化・風俗をも深く考慮した学問体系を創出して日本固有の優れた文化・国民性の探究・認識と、それを生活にとり入れ磨いた日本人としての美しい情操を養い、祖国の繁栄と世界文化へ寄与できる人材の育成に取り組んできた。

・国文科は、國學院大學の伝統を礎に体験学習に重点を置いた特色あるカリキュラムにより創造性豊かな教育を行ってきた。
・英語科は、聞く、話す、書く、読むの四つの技能を修得する周到かつ効果的なカリキュラムにより英語運用能力を高め、国際化社会に対応できる英語力を養ってきた。
・幼児教育科は、未来に生きる子どもたちの幸せを願って、豊かな人間性と専門性を高めるとともに幅広い知識をもつ優れた保育者の養成に努めてきた。
・こうした各学科の目的に添った教育カリキュラムは、昭和六十一年四月に更に充実をはかったところであるが、昭和六十三年四月からは、図書館司書、学校図書館司書教諭、秘書士の資格取得課程を開設し社会の要請に応えてき

入学式風景

た。

・学生指導の面においては、密度の濃い教育を行うため、本学に学ぶ全学生を、一年生、二年生とも十二名～十三名の合計二十数名のグループに分割組織し、全専任教師が必ず一グループを担当し、教学面ばかりでなく、就職問題、学園問題、校外生活などあらゆる面の相談相手となる全国的にもユニークな学生相談員制度を昭和五十八年五月から採り入れ充実した学生生活を送ってもらうことにより教育効果を十分に上げてきている。また大学と父兄との連携を細やかにすることから開学時に結成された父兄会と協議し、東京、盛岡、滝川ほか道内六都市において支部総会を開催、学生の福利厚生、教育環境づくり等の懇談をすすめ、併せて学生生活、成績、就職などに関する問題について父兄との個別面談を実施し成果をあげている。

・学生活動は活発で、地域との融和の中でコニュニティカレッジづくりの一環として、開学以来市民と学生との交流が深められてきた。開学当初は温かさと好奇の入り混じった学生の受け入れから、市民の一人として受けとめられるようになり市民と学生の交流の和は応がってきた。「アリス祭」と名付けられた大学祭には数多くの市民の協力と来場を得て、盆踊りやアトラクションへの市民参加、展示・発表の観覧など市民行事のひとつとして定着しつつある。滝川しぶき祭には、全学挙げて参加し地域の大学として地域と共に育つ努力を続けているところである。

一方課外活動の面では、福祉問題研究会、トントンサークル、人形劇サークルなどによる老人ホームをはじめとする市内各種施設の慰問などの活動を通して地域とのふれ合いの暖かい輪が大きくなってきている。また市内の各団体から、排球、籠球、羽球、剣道、弓道、アーチュリー、人形劇、茶道、華道、日本舞踊などのサークル活動に指導者が派遣され、各サークルとも道内、地域において徐々に成果を積み上げてきており、はまなす国体においては、女子成年の部の弓道において見るべき成果を収めている。

(10) 資格取得課程

・中学校教諭二級（国語・英語）　・幼稚園教諭二級
・学校図書館司書教諭　・図書館司書　・秘書士

(11) 道外出身入学者の増加

最近とみに道外出身者の入学比率が高くなっている。これは母体である國學院大學の発展、國學院大學への編入希望者と北海道にロマンを求める若者が増加していることと、本学の教育実績の評価が全国的にも定着しつつあることのひとつのあらわれである。

年度	入学者数	内滝川市分	道外出身者	同比率%
57	365	39	7	1.9
58	275	26	12	4.4
59	269	14	24	8.9
60	233	10	29	12.4
61	222	16	33	14.9
62	230	8	36	15.7
63	299	10	73	24.4
平元	282	14	87	30.9

(12) 卒業生の進路状況

卒業年月	卒業者数	進路決定者						進路決定率%
		就職者数	うち滝川市内	進学者数	家事・家業	その他	小計	
59.3	352	283	55	19	8	0	310	88.1
60.3	257	209	35	16	7	1	233	90.7
61.3	249	177	21	21	8	2	208	83.5
62.3	220	170	16	19	7	7	203	92.3
63.3	208	163	17	20	8	2	193	92.8
平元.3	217	170	14	29	7	2	208	95.9

(13) 國學院大學校歌（大正十三年十一月二十五日制定）

作詩　芳賀　矢一文学博士
作曲　本居　長世

一　見はるかすもの　みな清らなる
渋谷の岡に　大學たてり
古へ今の　書明（ふみ）らめて
國の基を　究むるところ

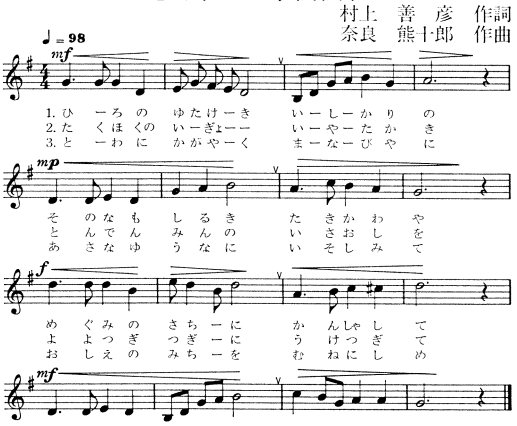
二　外（と）つ國々の　長きを採りて
我が短きを　補ふ世にも
いかで忘れむ　もとつ教は
いよよみがかむ　もとつ心は

三　學びのちまた　そのやちまたに
國學院の　宣言高く
祖先の道は　見よここにあり
子孫の道は　見よここにあり

第九節　校歌楽譜

滝川第一小学校校歌

村上　善彦　作詞
奈良　熊十郎　作曲



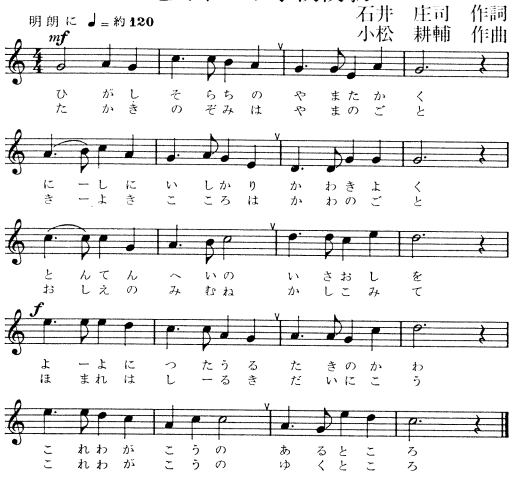
一、広野豊けき　石狩の
その名も著るき　滝川や
恵みの幸に　感謝して
希望に燃ゆる　朝日影

二、拓北の偉業　いや高き
屯田民の　いさおしを
代代次々に　受け継ぎて
護りて往かん　故郷を

三、とわに輝く　学舎に
朝な夕なに　いそしみて
教えの道を　胸にしめ
平和の国を　うちたてん

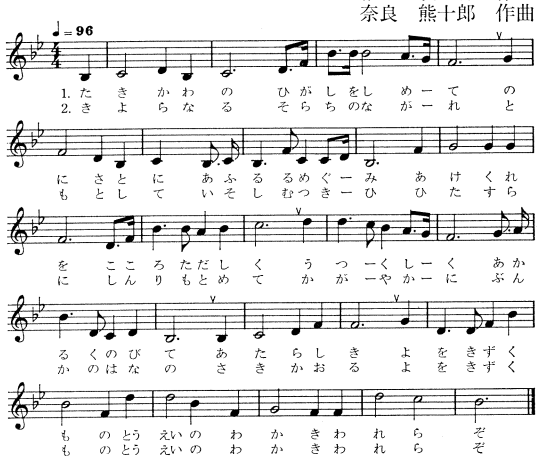
滝川第二小学校校歌

石井　庄司　作詞
小松　耕輔　作曲


明朗に　♩=約120
mf
ひ　た　か　し　き　そ　の　ぞ　ち　み　の　は　や　や　ま　た　の　か　ご　と
に　き　ー　し　ー　よ　に　き　い　こ　し　こ　か　ろ　り　は　か　か　わ　の　き　よ　ご　と
と　お　ん　し　て　え　ん　の　へ　み　い　む　ね　い　か　お　さ　し　こ　し　み　を　て
f
よ　ほ　ま　よ　れ　ー　に　は　つ　し　た　う　る　る　き　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

東栄小学校校歌

細田　義　行　作詞
奈良　熊十郎　作曲



一、滝川の東を占めて
野に里にあふるる恵
あけくれを心正しく
美しく明るく伸びて
新しき世を築くもの
東栄の若きわれらぞ

二、清らなる空知の流れ
友としていそしむ月日
ひたすらに真理もとめて
かがやかに文化の花の
咲きかおる世を築くもの
東栄の若きわれらぞ

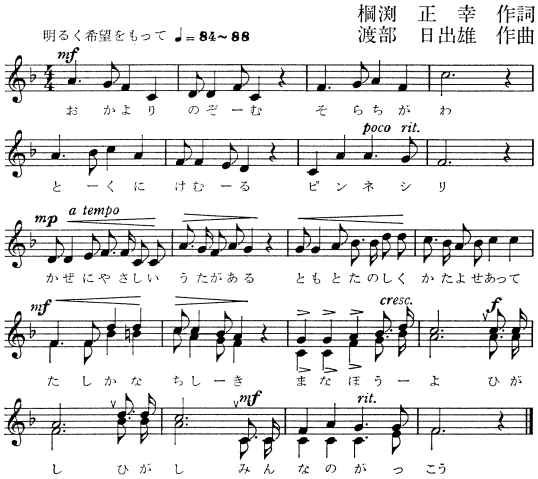
一、丘よりのぞむ　空知川
遠くにけむる　ピンネシリ
風にやさしい　歌がある
友と楽しく　肩よせあって
たしかな知識　学ぼうよ
東、東、みんなの学校

二、稔りゆたかな　この郷土は
屯田兵の　汗のあと
風にきびしい　歌がある
友と励まし　腕くみあって
たくましい体　きたえよう
東、東、みんなの学校

三、つつじ花さく　学び舎に
君とわたしの　えがくゆめ
風に明るい　歌がある
友と仲よく　手をとりあって
広い世へ界　はばたこう
東、東、みんなの学校

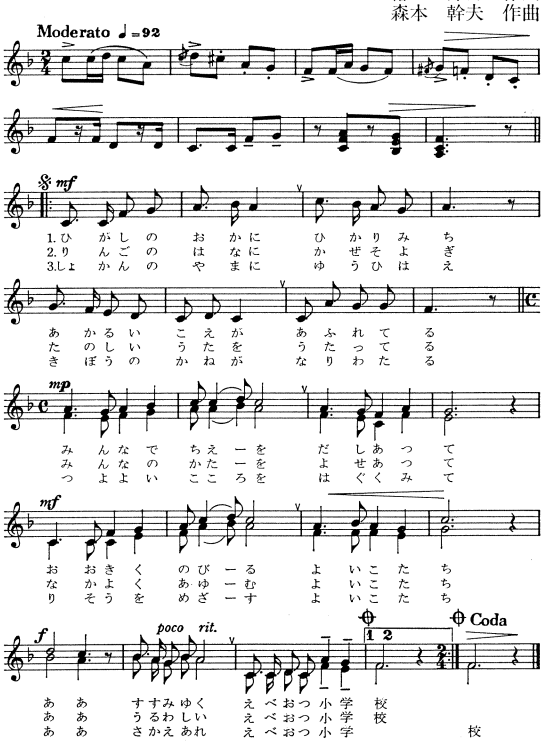
東小学校校歌

桐渕　正　幸　作詞
渡部　日出雄　作曲



江部乙小学校校歌

椿　邦男　作詞
森本　幹夫　作曲



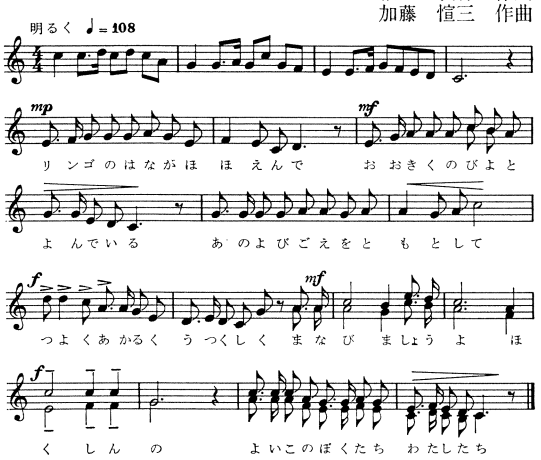
一、東の丘に光みち
明るい声が　あふれてる
みんなで知恵を　出しあって
大きく伸びる　よい子達
ああ進みゆく　江部乙小学校

二、リンゴの花に　風そよぎ
楽しい歌を　うたってる
みんなの肩を　寄せ合って
仲良く歩む　よい子達
ああ麗しい　江部乙小学校

三、暑寒の山に　夕日映え
希望の鐘が　鳴りわたる
強い心を　育ぐくみて
理想をめざす　よい子達
ああ栄えあれ　江部乙小学校

北辰小学校校歌

細田　義行　作詞
加藤　愃三　作曲



一　りんごの花がほほえんで
　　大きく伸びよとよんでいる
　　あの呼び声を友として
　　強く　明るく　美しく
　　学びましょうよ　北辰の　良い子の僕たち　私達

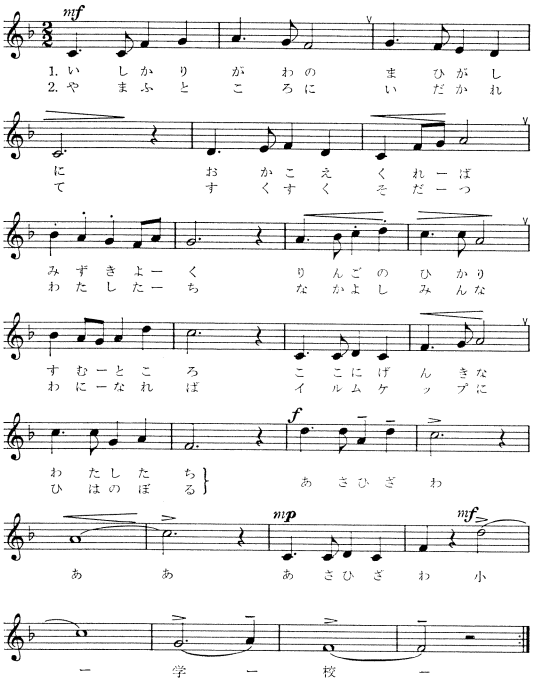
二　石狩川のすむ水も
　　かしこく伸びよとうたっている
　　あの歌声を友として
　　強く　明るく　美しく
　　励みましょうよ北辰の　良い子の僕達　私達

三　空行く雲が少年の
　　楽しいあこがれのせている
　　あの輝きを友として
　　強く　明るく　美しく
　　進みましょうよ北辰の　良い子の　僕達　私達

第一章　学校教育

旭沢小学校校歌

成田　徳男　作詞
森本　幹夫　作曲

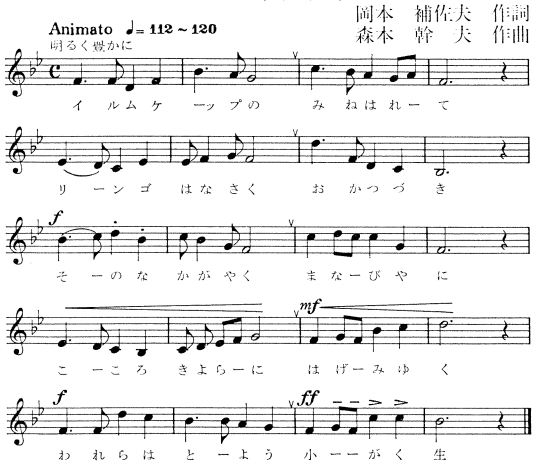


一　石狩川の真東に
　　丘越え来れば　水清く
　　リンゴの光り　澄むところ
　　ここに元気な　私達
　　旭沢
　　ああ　旭沢小学校

二　山ふところに　抱かれて
　　すくすく育つ　私達
　　仲よしみんな　輪になれば
　　イルムケップに　陽は昇る
　　旭沢
　　ああ　旭沢小学校

東陽小学校校歌

岡本　補佐夫　作詞
森本　幹夫　作曲



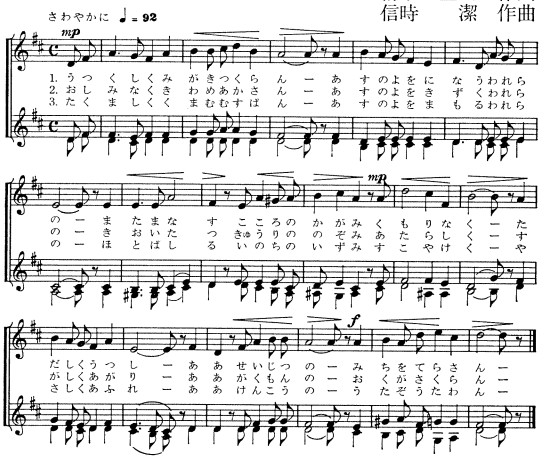
一　イルムケップの峰晴れて
　　リンゴ花咲く丘つづき
　　その名輝く学び舎に
　　心清らに励み行く
　　われらは　東陽小学校

二　川は石狩　水澄みて
　　沃野果てなき稲の波
　　歴史はえある学び舎に
　　力かたむけ努め行く
　　われらは　東陽小学生

三　高き理想を胸にして
　　若き日本の明日を負い
　　希望湧きたつ学び舎に
　　強く明るく進み行く
　　我等の行く手に光あり

江陵中学校校歌

清水　重道　作詞
信時　潔　作曲



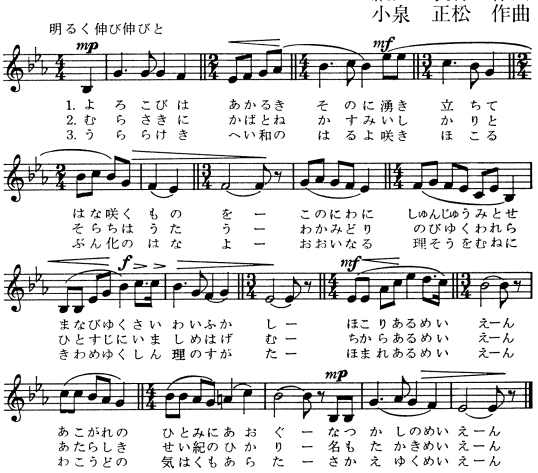
一　美しく　磨きつくらん
　明日の世を　担うわれらの
　ま玉なす　心の鏡
　曇りなく　正しく映し
　ああ誠実の道を　照らさん

二　惜しみなく　究め明かさん
　明日の世を　築くわれらの
　きおいたつ　窮理の望
　新しく　清しく昂り
　ああ学問の奥が　探らん

三　逞しく汲まん　綯ばん
　明日の世を　守るわれらの
　ほとばしる　生命の泉
　健やかく　優しく溢れ
　ああ健康の　歌ぞ歌わん

明苑中学校校歌

細田　義行　作詞
小泉　正松　作曲



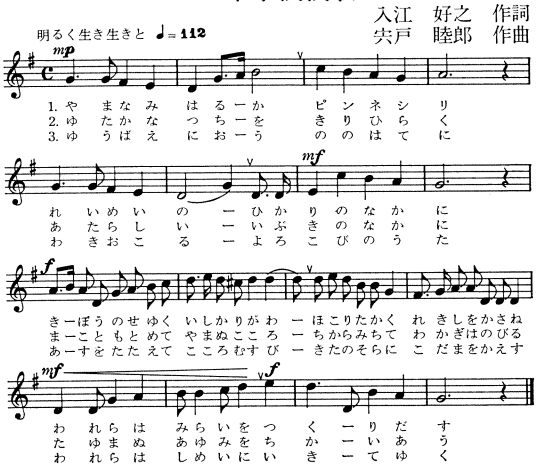
一　よろこびは明かるき苑に　湧き立ちて
　花咲くものを　この庭に　春秋三年
　学びゆく　幸いふかし　誇りある明苑
　あこがれの眸に仰ぐ　なつかしの明苑

二　むらさきに樺戸嶺かすみ　石狩と空知は歌う
　若みどり　伸びゆくわれら
　一すじにいましめ励む　力ある明苑
　あたらしき世紀の光　名も高き明苑

三　うららけき平和の春よ　さきほこる文化の花よ
　大いなる理想を胸に　きわめゆく真理のすがた
　誉ある明苑　若人の気魄も新に
　栄えゆく明苑

関西中学校校歌

入江　好之　作詞
宍戸　睦郎　作曲



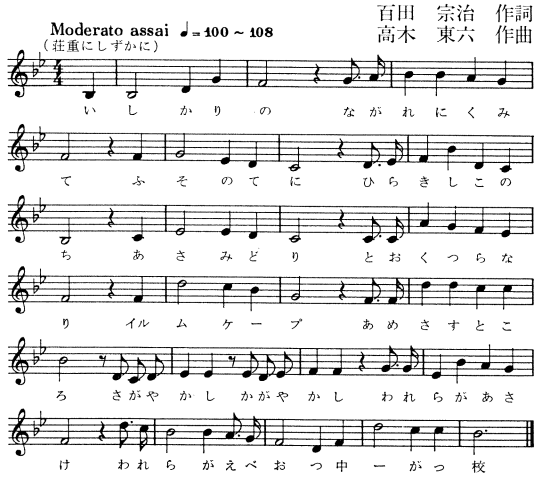
一　山なみはるか　ピンネシリ
　　れい明の　光の中に　希望のせゆく　石狩川
　　ほこり高く　歴史をかさね
　　われらは未来を　つくりだす

二　豊かな地を　きり開く
　　新しい　いぶきの中に　まこと求めて　やまぬ心
　　力みちて　若木はのびる
　　たゆまぬ歩みを　ちかい合う

三　夕映えにおう　野の果てに
　　わきおこる　喜びのうた　あすをたたえて　心結び
　　北の空に　こだまをかえす
　　われらは使命に　生きてゆく

江部乙中学校校歌

百田　宗治　作詞
高木　東六　作曲



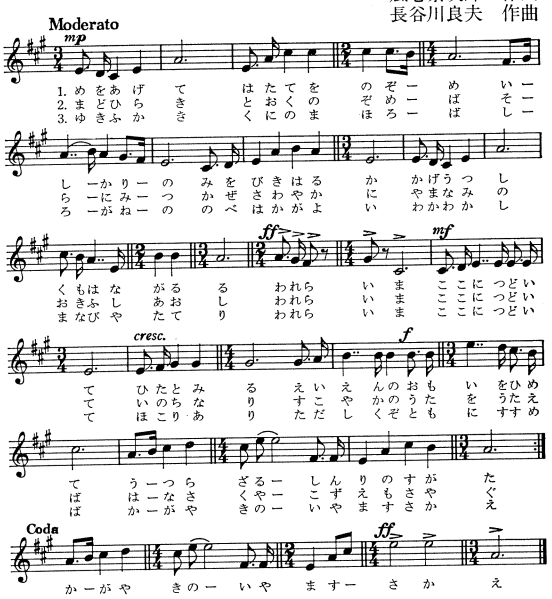
一　石狩の流れに汲みて　父祖の手に拓きしこの地
　　浅みどり遠くつらなり　イルムケップ天指すところ
　　かがやかし　われらが朝明
　　われらが江部乙中学校

二　身に負いし進取のこころ　あけくれをたゆまず強く
　　朔北の雪にみがきて　みずからの力に立たん
　　ほこりあり　われらが母校
　　われらが江部乙中学校

三　みはるかす丸加の丘べ　林檎園たわわにみのり
　　香をこめてきよくやさしく　よごれなき生命に生きん
　　光あり　われらが郷土
　　われらが江部乙中学校

滝川高等学校校歌

風巻景次郎　作詞
長谷川良夫　作曲



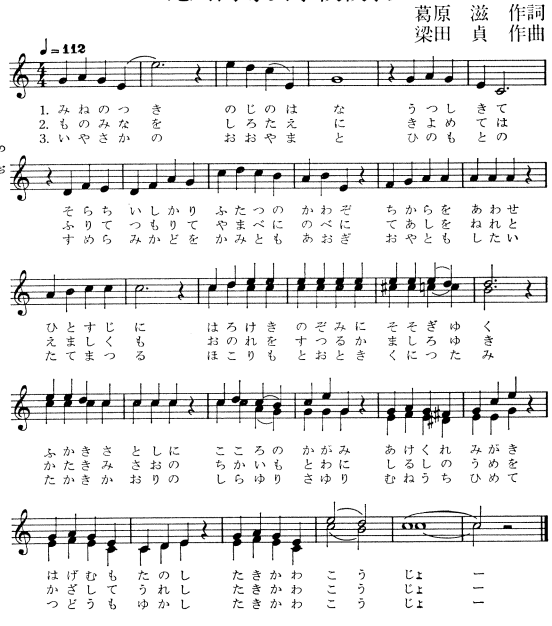
一　眼をあげて涯際を望め
　石狩の水脈引きはるか　影うつし雲は流るゝ
　われ等いまここに集いて　ひたと見る
　永遠の懐を秘めて　うつらざる真理の姿

二　窓ひらき遠くのぞめば
　空にみつ風爽やかに　山脈の起き伏し青し
　われ等いまここに集いて　生命なり
　健やかの歌をうたえば　花さくや梢もさやぐ

三　雪深き国のまほろば
　白銀の野辺は耀い　若々し学び舎たてり
　われ等いまここに集いて　誇あり
　正しくぞ共に進めば　かがやきのいやます栄え

滝川高等女学校校歌

葛原　滋　作詞
梁田　貞　作曲



一　峰の月野路の花うつし来て
　力を合せ一すぢに
　深き啓示に心の鏡明暮磨き

二　物みなを白妙にきよめては
　手足を練れと笑ましくも
　堅き操の誓も永久に校章の梅を
　降りて積りて山辺に野辺に
　おのれを捨つるか真白雪

三　弥栄の大やまと日の本の
　親ともしたひたてまつる
　高き薫の白百合小百合胸内ひめて
　天皇陛下を神とも仰ぎ
　矜も尊き国つ民
　集ふも床し滝川高女

空知石狩二つの川ぞ
遥けき希望に注ぎゆく
励むも楽し滝川高女

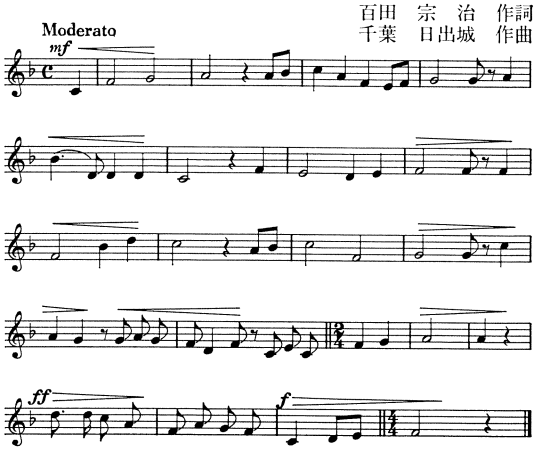
昭和二十三年五月改修

一　滝川女子高等学校校歌
　峰の月野路の花うつし来て　空知石狩二つの川ぞ
　力を合せ一すぢに　遥けき希望に注ぎ行く
　深き啓示に心の鏡明暮磨き　励むも楽し滝川女子高

二　物みなを白妙にきよめては　降りて積りて山辺に野辺に
　手足を練れと笑ましくも　おのれを捨つるか真白雪
　高き薫の白百合小百合胸内ひめて　集ふも楽し滝川女子高

滝川北高等学校校歌

百田　宗　治　作詞
千葉　日出城　作曲



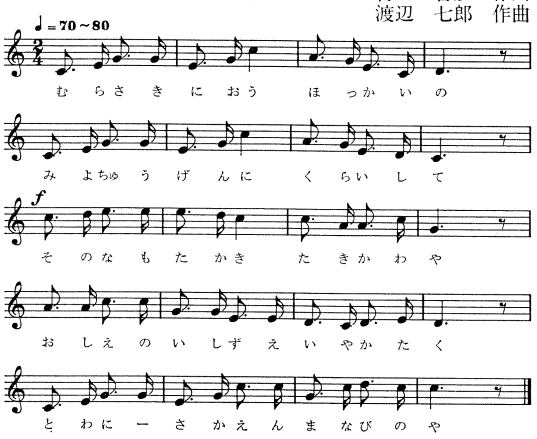
一　空知野　こゝにひらけ
　雲白し　イルムケプ
　枝なめて　たわゝに　苹果みのるところ
　栄えあれ　我等が滝川北高校

二　みどりの光あふれ
　地のめぐみ　つきるなし
　陽(ひ)に灼きて　春秋(はるあき)　土にきわめはげむ
　誉れあれ　我等が滝川北高校

三　蛍雪　こゝにみがく
　拓農の　道はるか
　丘の上の　夕星　崇く澄めるところ
　誇りあれ　我等が滝川北高校

滝川工業高等学校校歌

村上　善彦　作詞
渡辺　七郎　作曲



一　紫匂う北海の　見よ中原に位して
　その名も高き滝川や　教の礎いや堅く
　永久に栄えん学の舎

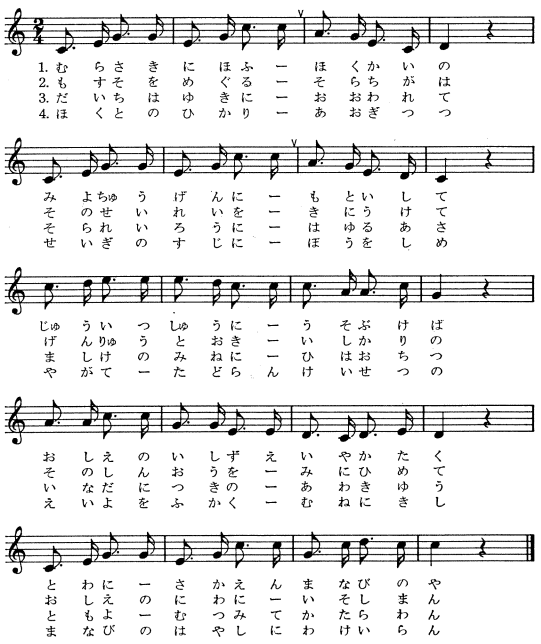
二　裳裾を環る空知川　其の清冷を気に稟けて
　源流遠き石狩の　其の深邃を身に秘めて
　教の庭にいそしまん

三　大地は雪に掩われて　天玲瓏と映ゆる朝
　増毛の嶺に日は落ちて　稲田に月の淡き夕
　友よ睦みて語らわん

四　北斗の光仰ぎつつ　正義の筋に帽を締め
　やがて辿らん蛍雪の　栄誉を深く胸に期し
　学の林わけ入らん

北海道庁立滝川中学校校歌

村上教諭　作詞
渡辺札幌師範学校教諭　作曲



一　紫匂ふ北海の　見よ中原に基して
十一州に嘯けば　教の礎いや堅く
永久に栄えん学の舎

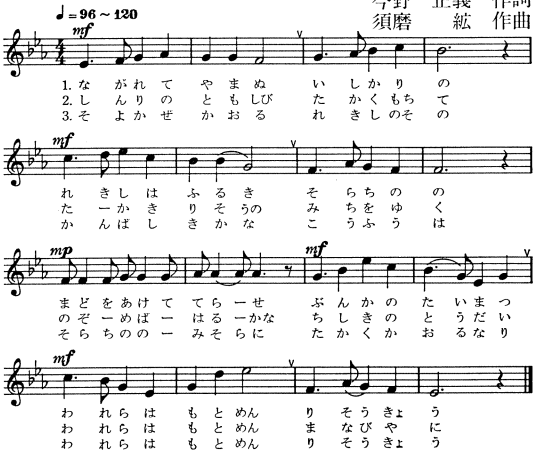
二　裳裾を環る空知川　其の清冷を気に稟けて
源流遠き石狩の　其の深蘊を身に秘めて
教の庭にいそしまむ

三　大地は雪に掩はれて　天玲瓏に映ゆる朝
増毛の嶺に日は落ちて　稲田に月の淡き夕
友よ睦みて語らはむ

四　北斗の光仰ぎつゝ　正義の筋に帽を締め
やがて辿らん蛍雪の　栄誉を深く胸に期し
学の林にわけ入らむ

滝川西高等学校校歌

今野正義　作詞
須磨紘　作曲



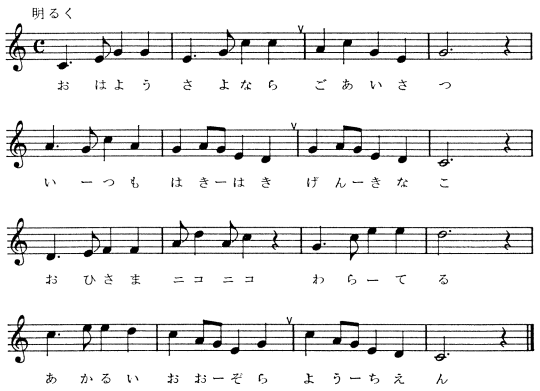
一　流れてやまぬ石狩(いしかり)川の
歴史は古き空知野の
窓をあけて照せ文化の松明
我等はもとめん理想郷

二　真理のともしび高く持ちて
高き理想の道を行く
望めよはるかな知識の燈台
我等はもとめん学び舎に

三　そよ風かおる歴史の園
香しき哉　校風は
空知野の虚空に高くかおるなり
我等はもとめん理想郷

おおぞら幼稚園園歌

小坂虎蔵　作詞・作曲



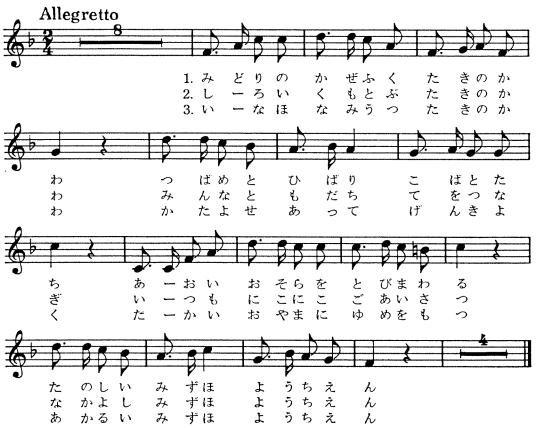
一
おはよう　さよなら　ごあいさつ
いつもはきはき元気な子
お日さま　ニコニコ笑ってる
明るい　おおぞら幼稚園

二
かけっこジャンプにボールなげ
雨にも風にも負けない子
高いおそらに　にじの橋
たくましいおおぞら幼稚園

三
おててつないで輪になって
いつもみんなで助けあう
ポッカリ浮んだ白い雲
仲よしおおぞら幼稚園

みずほ幼稚園園歌

粟井　稔　作詞・作曲



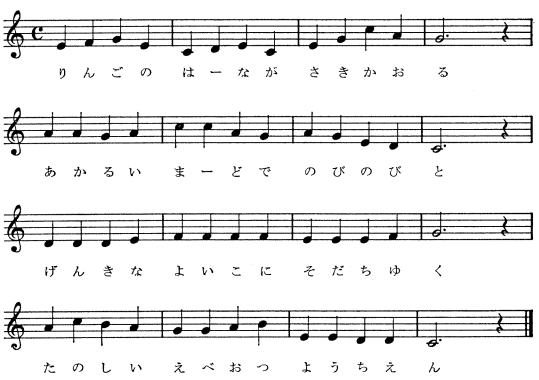
一
緑の風吹く　滝の川
つばめとひばり　こばとたち
青いお空を　飛びまわる
楽しい　みずほ幼稚園

二
白い雲とぶ　滝の川
みんな友だち　手をつなぎ
いつもにこにこ　ごあいさつ
仲良し　みずほ幼稚園

三
いなほ波うつ　滝の川
肩寄せあって　元気よく
高いお山に　夢をもつ
明るい　みずほ幼稚園

えべおつ幼稚園園歌

本川　之朗　作詞
不　　明　作曲



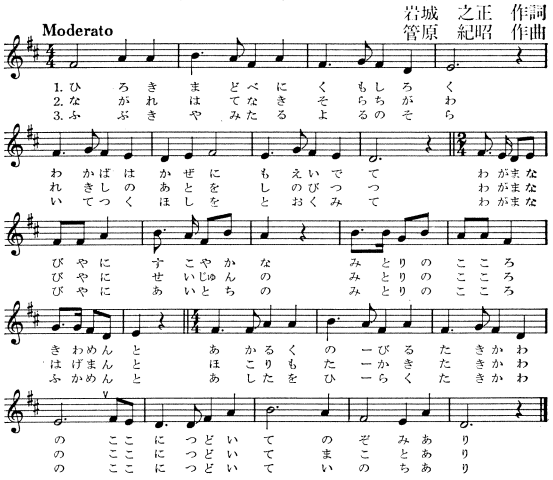
一　りんごの花が咲きかおる
明るい窓でのびのびと
元気なよい子に育ち行く
楽しいえべおつ幼稚園

二　皆んなで楽しくおもしろく
お歌遊びやブランコで
仲よしこよしで遊んでる
明るいえべおつ幼稚園

三　毎朝おがむのの さまの
深いおめぐみ忘れずに
優しい子供にのびてゆく
良い子のえべおつ幼稚園

滝川市医師会立准看護学院校歌

若城　之正　作詞
管原　紀昭　作曲



一　ひろき窓辺に　雲白く
若葉は風に萌えいでて
わが学舎に　健やかな
看護のこころ　究めんと
明るく伸びる　滝川の
ここに集いて　希望あり

二　流れ果てなき　空知川　歴史の跡を　偲びつつ
わが学舎に　清純の
看護のこころ　励まんと
誇りも高き　滝川の
ここに集いて　真実あり

三　吹雪止みたる　夜の空　凍てつく星を　遠く見て
わが学舎に　愛と知の
看護のこころ　深めんと
明日を拓く　滝川の
ここに集いて　生命あり